

---

# とある世界にチート転生してしまった件について

てんぷら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある世界にチート転生してしまった件について

### 【Nコード】

N4456T

### 【作者名】

てんぷら

### 【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった俺。『とある魔術の禁書目録』とある科学の超電磁砲』に転生させてもらえることになった。過負荷やら機巧魔神やら斬魂刀などのチートを引っさげて、大暴れ!!! 笑いあり、涙あり、ラブコメ(多分)あり、ポロリもあるのかあ!!

ブログ：俺死んじゃったの？（前書き）

はい、初投稿です。

今回はブログ。

稚拙な駄文ですが、これからよろしくお願いします。

ブローグ：俺死んじゃったの？

目が覚めると知らない部屋のベッドの上で寝ていた。

「ここはどこだ……」

「気がつきましたか」

「うおっ！！」

ベッドの隣に、小柄な少女が立っていたので声をあげてしまった。

「あんた誰……？」

「はい、神様です」

ハッキリと答える少女に対し懐疑的な目を向ける俺。どうみても嘘臭いだろうが。

「失礼な。こっに見えても神様ですよ！！」

いやいやいやいやいやいやいやいや。

「むう。それなら証拠を見せてあげますよ」

そう言った途端、俺の頭に映像が流れてきた。具体的に言えば、宇宙の始まりだの原始時代だのロケットの発射だのアカシックレコーダ的な映像がだ。そして、最後に流れたのは……俺がイカを喉に詰まらせた映像だった。しかも、リアルな感触まで



今回は許すが次からは気をつけるよ……」

というか、ひぐらしも真つ青な謝り方をされたのら逆に謝りたくな  
ってくるっつーの。

さて、俺はどうなるのかな。一抹な不安を感じていると、神様が謝  
罪会見のような声で怖ず怖ず提案してきた。

「お詫びとして、生き返らせることはできませんが、好きな漫画や  
アニメの世界に転生できるのですが」

「まじでエエエエエ!!」

「うわっ!!」

死んでから二回目のサプライズだ。エクステスばりに叫びましたよ。

「え? そんなことできるの!! あんた 救世主メッサーだよ、ゴッドだ  
よ、神様だよ!!」

「神様ですよ。その様子だとオーケーぽいので、どこに行くか言っ  
てください」

「じゃあ』とある魔術の禁書目録』と』とある科学の超電磁砲』の  
世界に連れて行ってよ」

思考に一コンマ、返答に一刹那しか、かからなかった。

上条さんと一緒にそげぶしたり、インデックスちゃんと食事した  
り、御坂とビリビリできるなんて夢とキボーにあふれているではな  
いか。

「じゃあ、斬魂刀と機巧魔神とボックス兵器と宝具をを全て寄越せ。  
アスラムキーナ

あと、アブノーマル 異常と マイナス 過負荷も使える上に、悪魔の実の力や自在法も使えるように……面倒くせえ！！アニメや漫画や小説やゲームの力を反動無しで自由に使えるようにしろ。後、諸々の武器を四次元ポケットにしまっておいてくれ。ついでに身体能力も聖人クラスまで上げといて」

ここまで一気に喋ったので、呼吸が苦しい。てか、ベタなチートにってしまった。

「そんなチートで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

大丈夫だった。神様が言うのなら、某インキュベータの契約とは真逆の評価で信頼してもいいだろう。

「ところで……」

「うん？」

「実は二つほど問題があるのですが」

「今、問題ないってイーノックなりに言ったばかりだよな！！」

前言撤回。インキュベータもいいところの不信感丸出したった。

神様が言うには、どうやら禁書世界では、その世界の能力。主に魔術や超能力は使えないらしい。

相手の能力を強化して使えるようになる『シ・エンド完成』、『ゲットアビリティプログラム』などでもコピー出来ないそうだ。

もう一つは、あっちに行ったときに何かしらの異常がでるかもしれないかもとのこと。

まあ、こっちで何とかすれば大丈夫だろう。

「んじゃ行くけどさ、何か色々ありがとうな」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。元はといえば私の責任です」

そう言う神様の顔は、申し訳なさそうだった。

それやあそうだよな。うっかりミスで人を死なせちゃったんだからな。

「神様」

神様の頭に軽く手を置く。

「あなたは自分の失敗で俺が苦しんでいると考えているみたいだが、それは違っぞ」

「え……?」

「だって、神様がこんなに可愛い子ちゃんだって知ることができて、嬉しいくらいだ。だからさ、そんな悲しい顔すんなよ」

ちよっと臭過ぎたかな。

けど、神様は嬉しそうだったから効果はあったようだ。柄にもないことをしちまったな。

突然俺の身体が白い光に包まれた。どうやら時間のようだ。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい。色々大変なこともありますけど頑張ってください。見守っていますから」

「ありがとう」

神様が笑顔で手を振ってくれたので、俺も真似をした。

さあ、旅が始まる。

ブローグ：俺死んじゃったの？（後書き）

次回！！

何だかんだで、禁書世界に來た俺。だが、重大な問題が起きる！

そして、御坂美琴を筆頭とする超電磁砲四人組との出会い。強盗との戦い。

果たして俺はどうなってしまうのか！

**第一話：超電磁砲組に早速介入（前書き）**

すいません。更新が遅くなりました。超電磁砲一話に早速介入しちやいます。

## 第一話：超電磁砲組に早速介入

目が覚めると、またまたベッドの上で寝ていた。ベッドから降り、部屋を見渡す。神様によると、俺は上条さんと同じ高校に通っている設定らしい。なので、ここはとある学生寮だと思われる。

ほらだつて隣の部屋からにやーにやー聞こえているし。シスコン軍曹こと土御門元春が隣人ということになるな。

「つまり俺は上条さんの隣の隣に住んでいるってことかあ」

思わず呟いたのだが、何か違和感を感じる。妙に声が高い。これまた思わず胸に手を当てる。

「げげえっ!?!」

柔らかい膨らみがそこにはあった。

「ま・さ・か」

部屋にあった鏡の前に立つと、そこ映っていたのは、先程までの美青年（自称）ではなく、これはこれは可愛い美しい美少女ではないか。

黒髪を肩まで切り揃えている清楚系。背丈は御坂くらい、バストの方は中くらいだ。

ご丁寧にも、とある高校（上条の高校な）の制服を着ているではないか。

「これが神様の言っていた弊害と言っわけか」

鏡に映った自分を見つめる。

「なるほど、なるほど、なるほど」

にっこりと微笑んだ俺は、

「ふざけやがって。クソツたれが」

右方のフィアンマばりにブチキレた。

どうすんだよコレ。これから女として暮らさないといけないのかよ。いろいろ問題があるだろーが。

というか何で女が男子寮で暮らしているんだよ。頭を乱暴にかきむしっていると、机の上に一枚の紙が置いてあった。

『やつほー！ みんなのアイドル神様ですよー。』

どうやらアナタは女の子になってしまったようですねー。

名前は衣川晶きぬかわあきり、無能力者の肉体再生でオートリパース、置き去りということにしておきました。

部屋の都合で特別に男子寮に住んでいる設定なので、安心してください。

ちなみに、滞空回線アンダーラインは、この部屋に入らないようにしているので、こちらから言わない限りアレイスターなどには正体がバレることはありませんよ。まあ、いきなり女になって戸惑うこともありますが、アナタなら大丈夫だと信じてます。

なにか用があつたら携帯にかけてください。

それじゃ、オーバー』

やーだー。

「畜生。余裕こいてた俺の責任だろうけど、これはキツいな。まあ、姿なんて変身能力でいくらでも弄くれるけどな」

下世話な話だが、風呂入るときとかトイレとか一苦労だな。早乙女乱馬の気持ちがあつたよ。

まあ、過ぎたことは何たらかんたらだ。取りあえず学校に出かける  
としよう。

日付を見ると、どうやら御坂が黒子達とクレープ屋に行く日、つまり超電磁砲一話の日付ではないか。

「上手くいけば、超電磁砲組に介入できるな」善は急げとばかりに、俺は準備を始めた。四次元ポケットがベッドの脇にあつたので、そこから斬魂刀やらリングやらライフル等の武器を取り出す。

これ以上出せば部屋が崩れるくらいまで、出てきた。床がミシミシ  
いっておるわい。

それを全部、制服の中に収納した。宗像形の異常性である『<sup>アブノーマル</sup>枯れ<sup>ラスト</sup>た樹海<sup>カベット</sup>』のお陰で、有り得ない量の武器が持てるのだ。

「しかし、まあ。ぶっちゃけ重い」

俺には聖人クラスの身体能力があるので平気なのだが、いざという  
時バテてしまいそうなので、真庭忍法『足軽』で武器の重さを消し  
ておいた。

髪をセットし、鞆を持って玄関の扉を開ける。外側に開いた扉がツンツン頭に命中した。

「朝っぱらから不幸だ……」

ため息をついた少年は、あろうことか主人公・上条当麻本人ではないか。

「やっべー!!! 本物の上条さんだ。何かドキドキしてきた。」

「うん？ 衣川、お前何か顔が赤いぞ熱でもあるのか」

「イヤイヤ。ヒーローを目の当たりにして拳動不審になっているだけですぞ。」

さて、俺は女の子な訳だから、女口調で話さないといけないな。

「ううん、大丈夫よ当麻くん。ちょっと寝不足なだけ。それよりさあ、今日は一緒に学校に行きましょ、うふふ」

「ねえよ!!! 自分で話して吐き気がしてきたよ。プリッシュ以上に違和感が働きまくりだよ。しかし上条の方はというと、何かしらないが照れくさそうに頬を赤らめているではないか。やべえ、上条さんにフラグ立てちまうかも。」

「まーた、この子は女の子といちゃつきやがって!!! 今度は、爽やか系神聖美少女こと衣川晶に旗を立ててんのかにやー」

突然、怨念に満ちた声が飛んできた。口癖で解ると思うが、金髪グラサン男の土御門元春君がやってきた。そーいやあ隣だったよな。てか爽やか系神聖美少女って何だ何だよ何ですかの三段活用。

「あら、おはよう元春くん。昨日は舞花ちゃんとラブラブしてたの

かな」

「ぎくうー！！　ななななななな何のこっちゃんですわい。土御門さんは、義妹に手を出したりなんか、し、してないにやー……」

俺の指摘に土御門があらさまに動揺した。わかりやすい奴。追い討ちをかけるように、上条が気怠そうにつっこむ。

「別に隠さなくてもいいぞー。お前のシスコンっぷりはバレバレだからな」

「違うんだ、違うんです、違うのだにやー！！」

<sup>シスコ</sup>変態の絶叫が寮中に響き渡った。

何だかんだで、俺と上条と土御門の三人で登校することになった。女言葉で話すのは疲れレールガンだが、正直言って楽しい。会話の中にも禁書らしさがあって、原作を読んだときのワクワクが溢れている。

途中で話題が御坂美琴の話になった。

「当麻くん、随分と疲れた顔をしているね。昨日何かあったの。これは制理ちゃん健康通販グッズの出番かしらん」

「昨日はビリビリ中学生に勝負だの何だの追いかけて回されて、上条さんはへトへトなのですよ」

「ビリビリ中学生って、常盤台中学の御坂美琴さんのこと？」

「そいつは、舞花の友達じゃないかにやー」

原作通り、上条は御坂に絡まれているようだ。御坂としては上条さんに素直に慣れないだけのようなのだが、上条からすれば面倒なものだろう。ご愁傷様。

「もしかして当麻くん、その美琴ちゃんに何かしたのかなー」

御坂の能力を幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>して消した上に、自分は無能力者<sup>レベル0</sup>だとか言っちゃって御坂のプライドを傷つけたのが原因なのは分かっているが、意地悪をしたかったので敢えて知らないふりをした。

「何だとお！！ カミヤん、てめエコラ。お前は女子なら中学生でも手を出すのか、このロリコンヤローめ」

「濡れ衣だー！！ 単に不良に絡まれているところを助けてやったら、意味不明な怒り方をされただけなのであって、上条さんは至極健全PTAに優しい少年ですよおー！」

「さてと、警備員<sup>アンチスキル</sup>の番号は、と……」

「衣川さーん！！ 誤解だからムシヨ飯生活だけは勘弁して、そして不幸だあああああ！！」

学校に着くと早速小萌先生に会い、教室では青髪ピアスやら吹寄やら、予想外に原作キャラとの会話ができた。ぶっちゃけ、モブも含めたクラスメート皆面白い上に良い連中だった。

そんでもってシステムスキャンがあったが、適当に無能力者<sup>レベル0</sup>判定で済ませておいて、放課後すぐさま教室から飛び出した。

「早速クレープ屋に行くのでしょうか」

予定としては、適当な理由を付けて御坂達に絡むつもりだ。

バタフライ効果が起きるかもしれないが、神様曰わくよっぱどの事をしなければ某運命石の扉のようにはならないらしい。

何かあったとしても、俺が軌道修正すればいい。

胸を高鳴らせながら歩いていき目的地に着いた。

小さい子ども達で随分と混雑しているな。結標が見たら喜ぶかもしれないぬ。

後、某炎髪灼眼とその恋敵みたいな人がいたがたぶん気のせいだろう。

列に並ぶと後ろに長髪の女子中学生が並んできた。柵川中学の制服を着ているその子は佐天涙子だ。

更にその後ろには、超電磁砲の主人公御坂美琴が、並んでいた。周りには、ツインテールの白井黒子と花飾りをかぶった初春飾利の姿が見える。

超電磁砲組はちゃんとクレープ屋に着たようだ。

クッククックク。さて、どう絡んでやろうかなあ。

俺が内心ほくそ笑んでいると、順番が回ってきた。

「チョコバナナクレープを一個ください」

「はい。少々お待ちくださいあい」

店員がクレープを作っているので、手持ちぶたさに待っていると、二つ後ろで御坂がイライラしたように腕組みをしていた。どうもゲコ太が欲しくて焦っているらしい。

「お待たせしました」

クレープを受け取ると、店員が「はい、どうぞ」と言って、髭の生えたカエルのストラップを渡してきた。

「最後の一個ですよ」

「どうも」

その瞬間、後ろにいた御坂が地面に腕を着けて落ち込みだした。

原作じゃあ佐天が最後のゲコ太を貰っていたが、俺一人分ずれたよ  
うだ。

このまま持って帰るのもそれはそれで面白そうだが。ゲコ太を羨ま  
しそうに見つめる御坂が余りにも不憫なので、差し上げることにし  
よう。俺は御坂に声をかける。

「あの、コレ要ります?」

「え? いいんですか!？」

「大丈夫だ、問題無い」

「ありがとう!!!」

柄にもなく、御坂は歓喜の声を上げる。こんぐらい素直な反応を上  
条にも見せればいいのに。

「よかったら、いっしょにクレープ食べましょう」

さり気なく介入する俺。まあ、こんな感じで上手く介入することに  
しよう。

ルンルン気分で鼻歌を歌う御坂といっしょに黒子と初春がいるベン  
チへ向かう。そして、自己紹介をすることになった。

「私の名前は御坂美琴と言います。それで、隣のツインテールが私の後輩白井黒子で、後ろの二人は左から順に佐天涙子さんに初春飾利さん」

御坂の言葉に、黒子初春佐天が礼をする。

「美琴ちゃんに黒子ちゃん、飾利ちゃんに涙子ちゃんね。わたしは衣川晶。あと、敬語は別に使わなくても良いよ。なんか堅苦しいというか、フランクな方がいいよね」

どうにも女口調に慣れてしまった。いまはまだ地の文は男だが、このままだと、新約に入るころには完全に女になっているかも知れない。

その後御坂達と談笑していると、初春が何かに気付く。

「うん？」

「どうしたの？」

初春に声をかけると、「あそこの銀行何ですけど」と言って向こうの銀行を指差す。

「何で昼間っから、防犯シャッターを下ろしているんでしょうか…」

その瞬間、防犯シャッターが外側に膨らみ出し、炎と共に爆発を起こした。

煙と共に悲鳴が上がる。御坂に絡んでいた黒子は、納豆と生クリームがトッピングされた悪趣味クレープを一気に平らげて駆け出した。

さあ、楽しい楽しいシヨータムの始まりだ。

**第一話：超電磁砲組に早速介入（後書き）**

いかがでしたか。

長くなったので、途中で切りました。

第二話：強盗VS俺だと！？（前書き）

今回は強引に晶ちゃんと強盗を戦わせました。

## 第二話：強盗VS俺だと!?

サイレンが鳴り響く中、黒子は初春に指示を出しながら、ジャッジメントの腕章を身に着ける。

「……黒子!」

手伝おうとする御坂だが、それを黒子がたしなめる。

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は、わたくし達のお仕事。今度こそ、お行儀よくして下さいな」

御坂の方も黒子に任せることにしたようだ。

煙を吹き出している扉の中から、三人の強盗グループが飛び出す。奪った金を持って逃走する算段だろう。

「お待ちなさい!」

すると、強盗達の前に黒子が立ちはだかった。

「ジャッジメント風紀委員ですの。器物破損及び強盗の現行犯で拘束します」

間近で聞いてみると、随分迫力があるな。上条さんの例の台詞も早く聞いてみたいものだ。

三人組の強盗は少しの間沈黙すると、途端に笑い出した。

「ぶっふあふあっふあー!! 何だあ、こんな小さなガキがジャッジメント風紀委員だとお」

「風紀委員も人手不足かよ」  
ジャッジメント

仮にも訓練を受けている風紀委員ジャッジメントに対し、余裕綽々でいられるコイツらの神経が理解できん。大方幻想御手レベルアップを使って、調子に乗っているのだろつ。

「おらお嬢ちゃん、怪我したくなかったら、さっさとお家に帰りな  
!」

三人組のうち、真ん中のデブが黒子に飛びかかってくる。  
だが黒子はデブの腕を華麗にかわすと、

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ」

持ち前の格闘術で地面に叩き伏せた。

「凄い……」

「流石、黒子」

佐天と御坂は各々の感想を口にする。

「この野郎……」

髪ストの逆立った強盗（名前忘れた）の手から炎を放った。発火能力ハイロキネシ者ストのようだが、黒子は意にも介さず突然姿を消すと、強盗の頭上に現れてドロップキックを喰らわせた。

「へえ、黒子ちゃんって、テレポーターだったのね」

怪しまれないように、一応驚いたフリをしておく。すると、御坂は自分のことのように誇らしげになった。「黒子は、常盤台で唯一のテレポーターなのよ。まあ、しょっちゅう変態なことに使いやがるけどね……」

「詳細を求む」

「どうしてアンタはそこで鼻息を荒くするのよ!?!」

「あれ？ 飾利ちゃん」

俺は御坂のツツコミを無視して、初春とバスガイドが揉めているところを指差す。

「危ないですから避難してください!!」

「でも……!?!」

「どうしたんですか!?!」

俺と御坂、佐天がバスガイドを尋ねる。

「どうやら、子供が一人戻ってこないらしい。」

「なので男の子を捜索することになった。」

「じゃあ初春さんと私はバスの辺りを探すから、佐天さんと衣川は道路側を探して」

「こういうときになると御坂は頼りになるな。流石常盤台のエースだ。原作では、佐天が強盗から子供を庇って怪我をするのだが、そんなの俺が許さない。」

すると、ちょうどよく道路脇に佐天が向かっていた。子供を連れて行くこうとする強盗に掴みかかり、佐天は止めようとする。

「ああ！？ 何だためエ、放せよ……！！」

「だめえ！！」

とつさに俺は、ハンバーガーを懐から取り出しパクリと食べる。すると、俺は超高速で佐天と強盗の間に移動した。

「き、衣川さん！？」

「な、何だ……！！？」 突然現れた俺の姿を見て、激しく狼狽する二人。

今のは、代償行為としてハンバーガーを食べることで高速移動ができる契約者の能力なのだ。ちなみに俺は、ハンバーガーが大好きなのさランランルー。

「くそっ！！！！」

しばらく硬直していた強盗は気を取り直すと、足を上げそのまま俺の顔を蹴り飛ばした。

激痛が顔面に響く。そのまま地面に叩きつけられ、体にも衝撃が走った。

「衣川さんッ！！」

佐天と初春が悲鳴に近い声をあげる。

黒子は金属の矢を指に挟んだまま駆けつけようとしたが、

「黒子っ！！！！！」

御坂の怒声がそれを遮った。どうやらマジ切れモードになっちゃったらしい。まあ、佐天じゃなくて俺でも怒ってくれるのは嬉しいが。

「ココからは私の個人的なケンカだから……」

そして、体中に紫電を撒き散らして宣言する。

「悪いけど、手出さ……」

「痛エエエだろお！！ 糞野郎がアアアアあ！！」

俺は外面もなく、凄惨な怒号を放った。その場にいた俺以外の全員が口を開けたままになる。

優しいお姉さんキャラが突然切れたからな、そうなるだろうよ。

理由だと？ 要は痛いんだよ！！ ぶつちゃけ聖人クラスの身体能力があつたところで、顔面を蹴られたら痛いだろうが！！ 例え防御力や体力があつても、1ダメージも同じダメージ何だよ！！

俺を蹴り飛ばしたクソ強盗は、白い車に乗り込みエンジンをふかす。砂埃を立てながらUターンをすると、そのまま猛ダッシュで向かってきた。

俺は道路の真ん中に立ち、みんなをまとめて吹き飛ばそうとする車と対する。さあて、転生生活最初の大暴れだ。

「吹っ飛べ、ゴラア！！」

ヴェントちゃんよろしく叫びながら、車に向かって拳を放った。

「17連釘パンチ!!」

凄まじい連撃を浴びた車は、機体の至るところを凹ませながら宙を二、三回転してアスファルトに落下した。

砂埃が舞う。

クラクションが、響き渡る中俺は思った。

やべえ、どう説明すればいいんだよコレ……。

夕方。警備員《アンチスキル》が、強盗の送検や現場の整備をしている。黄泉川先生もいたじゃん。忙しそうだったから声をかけなかったけど。明日学校で会えるからOKじゃん。

黒子と初春は、警備員《アンチスキル》への報告をしていた。そんな中、俺と佐天はというと。

「本当に、ありがとうございました」

先ほどの少年の母親からお礼の言葉をいただいていた。

「なんと、お礼を言って良いか……。ほら、あなたも」

「おねえちゃん達、ありがとー」

結標なら卒倒しかねない笑顔を向けてくれたので、俺と佐天は笑顔で返した。

嗚呼、神様。俺はこの世界で上手くやっていけそうです。  
親子とバスガイドが帰ったところで、御坂達が戻ってきた。

「お手柄だったね、二人とも。凄くかつこよかったよ」

いやあ。御坂に褒められると、何か照れるなあ。出番を喰っちゃったけど。

「『そんなことないよ。』『美琴ちゃんだってわたし達のために、クソご……じゃなくて強盗に立ち向かってくれたじゃない』」

俺は、かつこつけて返事をした。御坂は黒子に抱きついていて、初春は佐天と俺をを心配そうに見つめている。

「お姉えさまあ〜」

「だーかーらー。アンタはいい加減離れなさいってばー」

「佐天さん、どこか怪我していませんか」

「大丈夫大丈夫。衣川さんが守ってくれたからさー」

うんうん。平和が一番だよ、やっぱ。

俺はそのまま帰ろうときびすを返し……。

「……で」「」「」

四人娘の声が、それを許さなかった。

「な、なに……かしら？」

「アンタのことについて、説明してもらおうよ」

「そうですね。いくら何でも、車を素手で吹っ飛ばすなんて、並みの能力者には出来ないことですわよ」

やばいな。御坂と黒子は尋問モードに入っているし、初春と佐天はヤジウマモードに入っているし。俺は咄嗟の言い訳をする。

「いやあ、わたしは無能力者一《レベル0》なんで、今のは鍛えただけというか……」

「《レベル0お！？》」

また一斉に叫ばれた。こんなのおかしいよ。

その後、四人をなだめるために嘘説明をした。

黒子は半信半疑だったものの、その他は納得してくれたようだ。ただ、無能力者の佐天はショックを受けたのか、やけに静かだった。マイナスな話ではないから、大丈夫だ問題無いだろう。

それはともかく、よほど釘パンチが凄かったのか、御坂から「勝負しなさい」と絡まれた。

「何で、美琴ちゃんとケンカしなきゃいけないのよ」

「だって、車をぶっ飛ばすような奴に負けてなんていられないでしょ……！」

イヤイヤおかしいだろ。御坂が上条に絡むのは解るけど、コイツっ

てこんなキャラだったわけ？

「お姉様」いきり立つ御坂に黒子が横やりを入れてくれた。

「衣川さんの運動能力は人間的にはあり得ないものですが、それも常盤台のエースの超電磁砲《レールガン》であるお姉様の方が優位なはずですよ。第一、例のあのバカさん以外にもケンカをふっかけるつもりですか」

『あのバカ』という、単語が出てきたおかげか、御坂は黙然とする。

「ごめんね。私ちょっと興奮しちゃって」

「いいのよ。あなたのことは、愛しのツンツン頭上条君に色々聞かせてもらっているし」

御坂の顔が一瞬で沸騰し、真っ赤になった。流石、ツンデレ。

「え、ちょ、アンタあのバカの知り合いなの！？ ていうか、愛しのなんて、そんなにやことにゃい……」  
「なんかブツブツ言い出したよこの娘。」

「んじゃあねえ、また会いましょう四人ともー」

俺は隙を付いて猛ダッシュすると、その場から逃げ出した。後ろでビリビリになっていたが気にしないことにしよう。

第二話：強盗VS俺だと！？（後書き）

御坂が空気にならないようにしたら、初春が空気になってしまった。  
介入って難しい……。

### 第三話：ステルス対策は万全な件（前書き）

今回は眉毛事件に介入させちゃいます。

ちなみに、衣川ちゃん以外にもオリキャラを出そうか考え中です。

### 第三話：ステルス対策は万全な件

ある日、俺は四次元ポケットをまさぐっていた。

「ええと、あつたあつた」

俺はポケットから『着せ替えカメラ』を取り出した。そして、常盤台中学の制服に着替える。

別にコスプレ趣味に目覚めたわけではなく、ちゃんとした目的があるのだ。

名付けて『学舎の園ヘレッツスニーキング作戦』だ！！

今日の日付は、アニメ超電磁砲三話『ねらわれた常盤台』にあたる。眉毛女が佐天を襲った事件と言えばわかるだろう。何とかして学舎の園に潜入して、眉毛事件に介入しようという話だ。

ここ数日は、介入するチャンスに恵まれず、デルタフォーアスと馬鹿をやる日々が続いていた。俺の女らしさにも不本意ながら磨きがかかってしまい、最近では自分で違和感を感じなくなってしまった。最初はドキドキしていたお風呂も普通に入れるようになったり、肌や体重を気にするようになってしまった。

このままでは、新約どころか一方通行戦まで男でいられるか怪しい。山月記の虎になったような気分だ。

「ぶっちゃけ可愛いけどな」

自画自賛ここに極まり。

取りあえず外に出て、学舎の園のゲートの前に立つ。

一応、常盤台の制服を着ているので通れるとは思うが、念には念を

入れてオクトカムを使って姿を消す。  
それで、中に堂々と侵入した。

「んじゃあ御坂達と合流するか……」

俺は常盤台中学の校門前に向かった。そこに御坂、黒子、佐天、初春がいた。佐天は制服が水溜まりでびちゃびちゃになっている。

「あらー、御坂さん達。奇遇ね」

図々しく合流する俺。偶然も甚だしいわ。

「あ、アンタなんで、こんな所に。そして、何で常盤台の制服を着てんのよ!？」

「制服マニアの友達に貸してもらったの。わたしココのケーキを食べるのが夢だったのー」

ムギちゃんよろしく笑顔で言う俺に、御坂は呆れ顔になりながらも同行を許可してくれた。

常盤台中学の共用シャワールームで、初春は不機嫌そうにむくれていた。

「佐天さんだけです……」

「常盤台の制服が着たかったのね……」

「そつだ!」

急に初春のテンションが一変する。俺の言葉に何か思いついたようだ。

「私の制服と交換しましょう！ そうしましょう、それがいい！」

「ちょ、急に抱きついてこないで！ あと、サイズ合わないからー  
！！！」

初春の制服脱がし攻撃から耐えきった後、俺達はケーキ屋に着いた。

予定通り、初春と黒子は風紀委員ジャッジメントの仕事でいなくなり、佐天は御手洗いに行ったので、御坂と二人きりになった。

「んで、こうなるわけと……」

今現在俺は御坂から、前回有耶無耶にした件について、質問（という名の尋問）を受けていた。

御坂はテーブルに腕を組んで座り、俺は小ぢんまりと座っていた。

「まずは、あのバカについて教えてもらおうわよ」

やっぱ、その話題か。よし、話をそらすか。

「わたしが頼んだから別にいいんだけど、他の年上の高校生にはちゃんと敬語を使おうね……。いつか怒られるわよ」

一ヶ月後にギョロ目の女にな。

「話をそらさないで！！」

テーブルに拳を叩きつけて怒鳴られた。あまり上条の話をするとな人に迷惑がかりそうだしな。

俺は愛想笑いをする。

「え……と、ツンツン頭の彼とは同級生なだけよ……。美琴ちゃんが興味を持つようなことは余り知らないよ」

だから、そんな剣幕で睨まないでください御坂大明神様。

「少しでもいいのよ!! アイツの能力とか、住所とかその他諸々!!」

「ていうか、美琴ちゃんは当麻さんと何がしたいの」

「今度こそ、あの馬鹿をとっちめる!!」

おお、凄い気迫だ。

よっぽど、上条に負けっぱなしなのが悔しいと見る。  
少し意地悪をしたくなってきたな。

「でもさあー、当麻くんは結構女の子にモテモテ（限りなく答えに近い）だからさー、美琴ちゃんに構っている暇がないんじゃないかなー」

「え……」

「『一種のハーレム王ってヤツ?』 当麻くんの部屋に案外女の子がいたりして』 銀髪シスターやら巨乳サムライガールやらDS幼女やらかまचीの嫁やら一万人近くのクローン少女やらアルビノ百合子ちゃんやらを、落としちゃっているんじゃないのかしら」

後半かつこつけて危ないネタをふってしまったが、御坂には効果覿

面だったらしく、顔を赤らめてブツブツ言い出した。端から見るとキの字に見えるからやめた方がいいぞ。

「まさかあんな汚えない馬鹿に限ってそんないやでも不良に説教入れるようなヤツだし意外とモテモテなんじゃ……」

「あら？　そういえば涙子ちゃん遅くないかしら」

そろそろ介入する時間なので、御坂の思考ただ漏れ状態を中断させた。

御坂の方も異常に気がついたらしく、

「言われてみると、かれこれ十分間いないまよね。大の方をしているわけじゃないし」

「女の子が大とか言わないの……」

御坂を連れて高級チックなトイレに入るとそこには、

「佐天さん!？」

「涙子ちゃん!」

ぐったりと意識を失っている、佐天涙子の姿があった……。

意識不明の佐天を連れてジャッジメント風紀委員第一七七支部に俺はいる。

今は常盤台狩りの犯人を探しているところだ。俺は犯人を知っているがな。面倒だから、ちゃっちゃと誘導してしまおう。

「ねえ、飾利ちゃん。認識を阻害するような能力者を探してみて」

「あ、はい」

初春はキーボードを少し叩くと、それらしきデータを発見した。

「ありました。能力名は認識阻害<sup>タミーチェック</sup>。該当する能力者は一名、関所中学校二年重福省帆<sup>じゅうふくのみほ</sup>」

「そいつですわー!!」

黒子がいきり立って、声をあげる。落ち着けて。

「でも……この人異能力者<sup>レベル2</sup>です。自分の存在を完全に消せるほどではないです……」

もしかすると姫神はタミーチェックの能力を持っているんじゃないか。あの空気度は異常すぎる。

「良い線いってると思ったけど……」

「結局、犯人はそうそう見つからないって訳よ」

御坂がため息をつく。それと同時に佐天が目覚めた。この世界はフラグで動いてるのかよ……。

佐天は頭を抱えてソファーから起き上がる。

「「ぶふっ……!!」」

佐天を除く俺達四人さ急に吹き出す。



佐天の叫びに御坂は驚愕する。黒子も同じ様子で佐天に問いかけた。

「あなた……犯人を見たんですの？」

「はい……。あの時、鏡の中に確かに」

ダメージ  
認識障害はあくまでも、人の脳を誤魔化すだけに過ぎないので、カメラや鏡にはちゃんと映ってしまうのだ。そういう点では、冒頭に使ったオクトカムとは違うわけだ。

「ふっふっふっふ……」

見ると、佐天は忍び笑いを不気味かつ不敵に漏らしていた。ご立腹のようだ。

「この眉毛の恨み……晴らさないでおくべきか!!」

常盤台狩り犯人捕獲大作戦が始まった。

その後事前に打ち合わせしたとおりの位置に、俺は立っている。学舎の園の路地裏にいるのだが、人が全然いないではないか。

「さて……。眉毛ちゃんはどこかな」

十分ぐらい粘っていると、スタンガンを持った女子中学生を発見した。獲物を襲うチャンスを伺っているようだ。

「ハアあゝい。元気にやゝゝ？ 常盤台狩りの犯人ちゃん」

「くっ!?!」

途端、重福は能力を使って姿を消し、その場から逃げ去った。お前はオオナズチか。無線機で初春に指示を仰ぐ。

「飾利ちゃん、犯人はどつちに？」

『路地を出て左、三番街に入ってください』

「了解した」

初春の指示通りに進むと、それらしき気配を感じた。

「オオナズチにはコレかな」

アーチャーの投影で、煙玉を取り出し犯人の居そうな方へ投げつける。

白い煙が路地裏を漂い、犯人の姿を浮かび上がらせた。

「しまっ……」

犯人は可愛らしいゆかりんボイスで息を漏らす。

またまた投影で雛見沢製の巨大な鉈を取り出すと、近くの壁に叩きつけた。犯人は萎縮する（多分）が、構わず狂ったような笑い声を上げる。

「アハハハハ！！ 早く逃げないと、怒った私に殺されちゃうよお！！」

この場合「おいで、鉈女」と返答して貰いたかったが、相手にとっちゃそんな事情は知らんこっちゃで、一目散に逃げ出された。このまま犯人を追うのは面倒くさい。

俺は懐からスカウターを取り出し、スイッチを入れた。

「戦闘力たったの5……。ゴミが」

侮蔑の声を出し、俺はスカウターを頼りに犯人との追いかっこを始めた。

人を騙す認識阻害も機械は騙せないようで、犯人は見事追いつめられ公園まで逃げていった。

そうして、俺と御坂、黒子、佐天の四人で犯人を取り囲んでいる。

「どうして……」

重福の口から、疑問が溢れ出す。

「どうして、私の認識阻害ダメーチェックが聞かないの!？」

お前な、自分の能力のスペックぐらい把握しておけよ。俺だって、色んな能力を数日間チェックしていたんだぜ。

「もう一度、自分を見直すことね」

俺の言葉に、重福は鋭い敵意を向ける。

「これだから、常盤台の連中は……」

そのまま、手にしたスタンガンを持って俺に向かって突進した。って俺かよ!!

そういや俺って、常盤台の制服を着てたんだよな。

しかし、そこは流石俺。『最強の目』で、眉毛の攻撃を華麗に回避した。

「えっ……」

「ちえりおー！」

動揺する重福の背中に、肘鉄を食らわせた。

そのまま、彼女は地面に倒れて気絶した。

その間、ベンチに寝かせた重福を前にして、佐天は不敵な笑みを浮かべていた。

「さあさあ、どんな眉毛にしてあげましようかな……って、え……」

マジックを手にしながら、犯人のアイシールドみたいな前髪をかきあげた佐天は絶句する。

そこには、流石の両さんも同情するレベルの、オモシロ眉毛があるではないか。

そこでまたまた都合よく犯人が目を覚ます。そして、ほぼ反射的に眉毛を隠しながら、短い悲鳴をあげる。

佐天が、非常に気まずそうに声をかけた。

「ええと……」

「……おかしいでしょ」

「「はい？」」

「笑いなさいよ！ 笑えばいいんだわ！！ あの人のために」

御坂らが首を傾げるのにも構わず、眉毛は勝手に変な過去を語り出した。

要約すると、彼氏が常盤台の女子と浮気をしていたので問い詰めたところ、眉毛が変だからという理由で振られたという、俺的にはどうでもええ話である。

そして、

「この世の眉毛、全てが憎い！！ だから、みんな面白い眉毛にしてやるうと思っただのよ！！」

「うわっ……」

思わず、『炎刀・銃』で撃ち殺しそうになったが、色んな意味でヤバいので我慢した。

（呆れて）押し黙る俺達を見て、重福は眉毛見せつけるような仕草をした。

「……どうしたの。さあ早く笑いなさいよ！！」

「変じゃない思うよ、その眉毛……」

優しく声をかけた佐天に、いきり立っていた重い福が動揺する。続けざまに佐天が、一步引いた風ながらも言葉を紡ぐ。

「何ていうかチャームポイントみたいで、あたしは好きだなあー」

言い方が、まずい料理を無理矢理誉めたような感じだぞ、佐天よ。

しかし、重福の気に障った様子ではなく、むしろ嬉しそうだ。その証拠に、彼女の頬が赤くなっていた。

再び啞然とする佐天に対し、俺は優しく語りかける。

「二人ともお幸せに」

「ええっ！？ いきなり何言ってるんですか」

「え？ 涙子ちゃんって百合じゃないの。PANTSUラブじゃないの」

「……はあ？ 何であたしが」

あれ？ この娘初春のパンツをいつも覗いているよね。

というか、何で御坂も黒子も、俺をそんな冷たい目で見ているの。

これじゃあ、まるで俺がHENTAIみたいじゃないか。

「そ、そんなことよりさあ、涙子ちゃんの眉毛って消せるかな」

余りにも気まずいので、眉毛女に話題を振った。

「そのお、第十学区の大学で開発されていた特殊なインクを使っていたので……。一週間は消せないんです、ゴメンナサイ!!」

重福は非常に申し訳なさそうな表情を浮かべ、頭を下げた。ほぼ同時に佐天も頭を下げる。

「佐天さん……。帽子を用意してあげますから、落ち込まないでく

「ださいな」

佐天の肩に優しくてを置く黒子。佐天はやケになったような笑いを漏らしている。

余りにも可哀相なので、ポケットから液体の入った瓶と白いガーゼを取り出し、佐天に呼びかける。

「ちょっと、顔貸して」

ガーゼに液体を一滴かけ、佐天の眉毛を拭いた。すると、あら不思議。落書きが一瞬で消えたではないか。

その光景に、俺以外の全員が驚愕していた。

「な、アンター一体何をしたのよ……」

「ガーゼで拭いただけですが、何か」

というのは嘘八百で、実は全てを無かったことにするマイナス過負荷大嘘憑オイルフイグきを使って、落書きを無かったことにしたのだ。無論、いきなり眉毛が消えると怪しまれるので、ガーゼで偽造しておいた。

佐天は大喜びしたようで、仕切りに俺の手を握っている。対して御坂は、訝しげに自分の手に持った瓶を睨んでいた。

不味いな、何か怪しまれている。まあ、所詮はただの水なので、問題は無いだろう。

「ところで、衣川さん」

黒子が俺に声をかけてきた。もしかして、バレたか。

「その液体を貸して貰えませんか」

「はい？」

「ほら、落書きの被害者は大勢いますし、その方々のアフターケアしてあげませんと……って、顔色が悪いですわよ？」

予想斜め上でピンチだ。だって、ただの水だもん。

俺はとっさに、懐から携帯を取り出し耳に当てる。

「俺だ。ああ、『ドラゴン』の秘密を探ろうとする、鼠がいた。直ぐに、記憶操作を……」

「電源の入っていない携帯で、何やってんのよアンタは……」

そっぴや御坂って電気を視認出来るんだったよな。

「というか、その液体を貸してほしいと……」

「……さらばだ」

俺を引き留めようとする黒子を見無視して、再び全力でその場から逃げ出した。

次からは墓穴を掘らないようにしよう。俺はそう誓ったんだ。

重福が警備員アンチスキルに輸送されたのを見届けた後、上機嫌でスキップをし  
ながら、佐天は帰った。

謎の高校生・衣川はというと、三十分前に突然どこかへ逃げ出した  
のだ。黒子は少し追ってみたが、見事に巻かれていた。

美琴はふと、白井に声をかける。

「彼女、どう見ても完璧に消えていたよね」

「そういえば、異能力者レベル2という話でしたのに」

「それとさ……」

美琴は手に持っていた瓶を、白井にみせる。どう考えても、ポケッ  
トに納まらない大きさだ。

それを衣川は、ポケットから取り出していたのだ。

「これ、ただの水よ」

「本当ですよ！？ それでは、佐天さんの落書きを消したのは一体  
……」

衣川が佐天の額を拭いたら、まるで無かったことにされたように、  
落書きが綺麗にとれたのだ。

更に数日前、車を吹き飛ばすほどの怪力を見せていた。

「アイツ、無能力者<sup>レベル0</sup>だつて言つてたよね」

「ええ、書庫<sup>バンク</sup>にもそう書かれていました。後、彼女は置き去り<sup>チャイルドエラー</sup>だつたことくらいしか……」

「もしかして書庫<sup>バンク</sup>が間違つていたとか」

白井は少し沈黙したが、すぐさま「まさか」と一蹴した。もちろん、美琴も本気で言つた訳ではない。

ただ、美琴は衣川から得体の知れない何かを感じていた。それが善なのか悪なのかは分からない。

ただ。

美琴には気になることがあつた。

（衣川はあのバカと一体……）

どうでもいいことなのに。その疑問が、彼女の頭からしばらく離れなかつた。

学園都市に点在する『窓のないビル』。内部には巨大なビーカーがある。その中で、男にも女にも大人にも子どもにも聖人にも囚人にも見える『人間』が佇んでいた。

学園都市・統括理事長アレイスター「クロウリーは一人呟いた。

「衣川晶か……」

アンダーライン  
停滞回線を駆使して、学園都市を監視していたアレイスターは、一人の人物に着目した。とある少女が、常軌を逸した身体能力で車を破壊したのだ。

彼女は無能力者レベロと称していたが、アレは常識で起こせる現象ではない。

だが、それだけでアレイスターの興味を引いたわけではない。己の能力を隠している能力者など、それなりには存在するのだ。

理由は二つ。一つは、衣川晶からAIM拡散力場を感知することが出来なかった。それは彼女が能力者、もとい科学サイドではないことを示していた。

もう一つは、衣川の所有していた有り得ない量の装備から、未知の力を感知したからだ。それは超能力や魔術ではない何か。

アレイスターの情報網には、置き去りチャイルドエラーとして学園都市に来た、普通の学生としか示されていない。

土御門元春のような魔術サイドからのスパイではないということになる。

（干渉してみるのも悪くないが、今は幻想殺しイマジンブレイカーと同じく様子見といったところか……）

そして、『人間』アレイスター「クロウリーは口元を歪め呟く。

「さて、君はこの世界をどう傾けるのかな、衣川晶」

### 第三話：ステルス対策は万全な件（後書き）

最近テストやらで忙しく、更新が遅れ気味です。頑張っ  
て執筆をします。のでご容赦ください。

**第四話・虚空爆破事件……だと……！？（前書き）**

今回は、衣川ちゃんがデパートでお買い物します。

深夜のテンションで書いたのでご了承下さい。

テストあるのに、何やってんだらうか（苦笑）。

第四話：虚空爆破事件……だと……！？

七月十八日。

俺は、ただ今セブンスミストで買い物中だ。

何を買うのかというと、洋服を探しているのだ。

転生した当初、クローゼットの中には制服とパジャマが二、三着あるくらいだった。

これではいかん、と思い、服を調達することにした。

実を言うと、服くらいなら俺の能力でピッコロのように出すことができる。しかし、学園都市の服というものを見てみたいから、あえてしなかった。

忘れているかもしれないので確認しておくが、今の俺は美少女です。美少女です。美少女です。

大事なことなので三回言いました。

こういつちゃあ何だが、地味（非常に失礼）な制服じゃあ俺の可愛らしさは半減するし、そこいらのモブと同程度に見えてしまう。

ここは俺を引き立てるような、オサレなファッションにしてやろうじゃないかね。

「ウエへへ。さあて、何を買いますよっかなあ」

至極気味の悪い笑みを垂れ流しながら、目についた服を片っ端から試着し始める。

数十分後。俺の両手は買い物袋でふさがっている。  
いやあ、いい買い物をしたね。

目的を果たした俺は、そのまま自宅でファッションショーを開催しようとして帰路に着こうとした。  
そついや何か忘れてる気がするが、はて？

思案気味に足を運んでいると、向こうに見覚えのあるツンツン頭がいた。

「おーい、当麻くん」

俺の呼びかけに気づいた上条は、こちらへ向かう。

ふと見ると、小学校低学年ぐらいの小さい女の子を連れていてはないか。アクセラレータ一方通行が喜びそうな、可愛らしい幼女だ。

「あら、当麻くんって、やっぱりロリコン？」

「ちげーよ。やっぱりって何だ。この子に、洋服屋に連れていけて頼まれたんだよ」

見知らぬ幼女に、買い物付き添いを頼まれている時点で、異端審問確定なのだが、今はやる気持ちは抑えることにしよう。

俺は女の子に笑顔で話しかける。

「お姉ちゃんも、一緒について行っていいかな？」

「いいよー。あたしね、いーっぱい、おめかしするんだよ」

可愛いな。やっぱ、子どもは純粹でいいな。

「ねえ、お嬢さん。『にゃーん』って言うってみて」

「うん？ にゃーん」

「カ・ワ・イ・イ・イ……！」

「何やってんだよ、お前……！」

中の人ネタで遊んでいる俺を上条は呆れ気味に見つめていた。幼女は正義。異論は認めぬ。

おふざけはコレくらいにして、上条を連れて洋服売り場に戻っていると、またまた見覚えのある茶髪がいた。

彼女は鏡の前で、子供チックなパジャマを持っていた。恥ずかしさから、周りに見られる前に急いで合わせているようだ。

「なにやってんだビリビリ」

「ずいぶん、ラブリーなパジャマね（笑）」

上条と俺に突然声をかけられた、御坂は壊れた鳩時計のような驚き方をした。

とっさに、パジャマを後ろに隠しているが、丸見えや。

「な、なんでアンタ達がココにいんのよお……！」

「いちや悪いかよ」

動揺中の御坂さんが、結構失礼なことを言ったので、上条さんがツコム。

「おにいちゃん！ おねえちゃん！」

すると女の子がこっちにやって来る。好奇心旺盛な年頃らしくアチコチ見て回るので、少し目を放すと何処かえ行ってしまうのだ。

「あ！」

うなり声をあげて威嚇している御坂に、ふと女の子が声を出した。

「このまえの、常盤台のおねえちゃんだあ」

御坂も女の子のことを思い出したようで、

「ああ！ カバンの……。って、まさかアンタ達兄弟！？」

「違う違う。俺はこの子が洋服店探してもらってから、案内してたんだ。てか、衣川。お前、ビリビリと知り合いだったのか」

「この前、会ってね。お友達になつたんだ」

銀行強盗や通り魔と一緒に捕まえた仲だ。御坂の方はどう思っているか知らんが、俺は友達だと思っているぞ。

「そつちこそ、アンタと衣川はどんな関係なのよ！！」

何故か喧嘩腰の御坂さんに、上条は面倒くさそうに答える。

「どんなつて……。ただのクラスメートで馬鹿やつてる仲かな」

「え〜。『ただの』じゃないでしょ」

そう言うと、俺は上条の腕にしがみつく。俺が元男と考えれば、気持ち悪いことこの上ないが、いまの俺は美少女である。瞬間的に上条と御坂の顔が赤くなる。

「と・う・ま・く・ん、とは〜。あんなことや、こんなことをやった仲でしょう」

あんなこと＝ゲーセンで遊んだ。

こんなこと＝宿題を教えた。

代名詞つて、ほんと便利。

「き、きききキヌカワサン！ 一体何をしているのでございありませんか……！？」

未知の現象を前にして、日本語がおかしくなってる上条さん。御坂も、体中から電気が漏れている。

面白いから、胸をこすりつけてやった。

「わたしは、当麻くんのが、だーいすきだよ」

バカキャラ完全解放中の俺に、上条はライフゼロ寸前だ。

そして、御坂の堪忍袋の緒が切れた。

「アンタ達……！！ 公衆の面前でイチャイチャしてんじゃないわよッ……！！……」

上条と俺に向かつて、電撃をぶちまけてきた。

上条は幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>しで電撃を打ち消し、俺は喰らったダメージを不慮<sup>エンカウ</sup>の事故<sup>シタ</sup>で床に押し付けた。

よって、どっちもノーダメージでした、はい残念。

「ハアハア……。アンタ達って、ほんと何者よ」

御坂が愚痴るように呟く。

「何者って、ただの無能力者<sup>レベル</sup>だよな」

「だよな」

俺と上条の夫婦漫才に、御坂は突っ込もうとしたが、そんな気力はもうなかったようだ。

会話もこれくらいにして、洋服店へ再三向かうことにした。

途中、女の子が、

「おにいちゃんとおねえちゃんってラブラブなの？」

こんなことを言って、上条がフリーズしてしまった。

女の子が向こうに行ってもオブジェクト状態の上条の、目の前で手を降っても、ツンツン頭を引っ張っても、全く反応しなかった。

そんなにシヨックだったか。

どうしたものかと思案していると、突然アナウンスが鳴りだした。

『お客様にご案内申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、まことに勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』  
思い出した。

クラヒトン  
今日は虚空爆破事件の日だ。

ジャツジメント  
確か、風紀委員を狙っていたんだよな。

「当麻くん！ 避難するよ」

「おう！」

デパートの外に出ると、人混みが出来ていた。  
人混みの中には、御坂と佐天がいる。  
しかし……。

「衣川、あの女の子は!？」

「外にいると思うんだけど……。美琴ちゃんに訊いてみましょう」  
一刻を争う事態なので、すぐさま御坂に声をかける。

「美琴ちゃん!! あの女の子を見なかった!？」

「ええ!？ 一緒にいたんじゃないの」

「それが、途中ではぐれちゃって……」

「何やってんのよ!?!」

上条の返事を聞き終わらないうちに、御坂はデパートの中へ向かった。  
俺と上条も後を追う。

手分けをして捜していると、腕章を腕に付けた初春と女の子を発見した。

女の子は、不細工なカエルモドキのぬいぐるみを抱えている。つて、爆弾じゃねえか！！

俺はわき目もふらず叫んだ。

「初春！！ そいつは爆弾だ！！」

俺の声に仰天した初春は、即座にぬいぐるみ爆弾を放り投げる。しかし、ぬいぐるみは量子変速シンクロトロンにより、いびつに圧縮され爆発寸前だ。

「クッ！」

御坂と上条も俺の叫び気づいたが、距離が遠くて間に合いそうになり。

ええい！！ 仕方ない。

「来い、鐵！」  
クロガネ

俺の声に応じて、四メートル前後の黒いロボットが、召還される。

「行つけえええ!!」

俺は鐵クロガネを操り、爆弾に向かって、重力波ともなった拳をぶち込んだ。

凄絶な爆音が、響き渡る。

爆発により、床は削り焦げ、壁は壮大に吹き飛ばれる。

だが、初春と女の子は無事だった。

何が起きたのか分からない様子で、キョトンとしている。

「初春!!」

俺は初春の元へ駆けつける。

「どこか怪我はないか!？」

「え……ええ、大丈夫です」

「良かったあ……」

胸をなで下ろすと、俺は突然の爆発に怯えている女の子を優しく抱きしめる。

「もう大丈夫だからね、心配しないでいいよ。ちゃんと、お姉ちゃんを守るからね……」

女の子は安心のあまり、俺の胸の中で泣き出してしまった。

……危なかった。

もしも、誰も間に合わなかったら、初春と女の子は最悪死んでいたかもしれない。

そうだったとしても、俺の能力（鋼やら大嘘憑きやら）で蘇生することはできるが、命をそんな風には考えられない。蘇生使う必要になるのなんて、元死人の自分だけで十分だし、どうせ生き返るからと、他者の命を粗末にする真似など言語道断だ。

一度死んで転生している身の俺だからこそ、命の尊さは身を持って知っている。

俺は怒りに震えていた。

介旅初矢……。

この落とし前はつけてもらおうぞ。

人氣が全くない路地裏。

眼鏡をかけた学生、介旅初矢は恍惚の笑みが止まらなかった。

「もうすくだ……」

自然と言葉が漏れ出す。

負の感情から来る、優越感に満ちた言葉だ。

ついさっきセブンスミストで、彼曰く、無能な風紀委員シャッジメントに能力を試

したばかりだが、成果は目を見張るものだった。

結果、ビルの壁が吹き飛び、爆炎が燃え盛っていた。しかも、予想以上の重力波を観測出来たのだ。

無敵のチカラを手に入れた気分だ。

「もう少し数をこなせば、みんなまとめて吹き飛ばせる……!!」

彼は喜びの絶頂にいた。

が、すぐさまそこから叩き落とされた。

突然、介旅の身体が吹き飛んだ。

理由は簡単。

後ろから忍び寄っていた、少女に蹴り飛ばされたからだ。

そのまま、壁と地面に衝突する。そこら辺のゴミ箱が倒れた。

「一体何が……」

介旅は訳がわからず、呆然とする。

「よお。爆弾魔」

顔を上げると、そこには少女が立っていた。

黒髪を肩で切りそろえていて、セーラー服を着ている。

「な、なんのことかな……。僕にはサッパリ……」

介旅は動揺しつつも、とぼけていた。

しかし、少女はわざとらしく顔に似合わぬ乱暴な口調で追い討ちをかける。

「死傷者ゼロどころか、けが人はだれもいなかったぜえ。いやはや、たいしたものだな、お前のクソ能力シンクロトロン量子変速（笑）は」

自分のチカラを侮辱され、介旅は思わず言い返す。

「そ、そんなバカな！？ 僕の最大出力だぞ……あつ」

「サイズハンゲかまかけ成功」

うっかりボロを出してしまった介旅は、取り繕うような言い訳をしだす。

カバンに手をやりながら。

「いやあ、外から見ても凄い爆発だったから……」

そのまま、カバンから取り出した、スプーンを少女に向かって投げ出した。

「助からないじゃないんかってエ!!」

能力により圧縮されたスプーンが大爆発を起こす。

少女はそのまま爆発に飲み込まれた。

「……はは。ぞ、ぞまあみるッ！」

勝利の雄叫びが響く。

煙が晴れば、少女の死体があるはずだ。

介旅は満足気に目を凝らす。

そこには、張り付けたような笑みをしたまま、少女が立っていた。

見ると、破けたセーラー服や火傷がだんだんと消失していたではないか。

まるで、全てを無かったことにされたかの如く。

「なっ、何だ……!?!」

なめ回すような不気味を肌で感じた介旅は、他のスプーンを最大出力で爆発させる。

「縛道の八十一・断空」

少女が謎の言葉を唱えると、少女の目の前に巨大な長方形の光の壁が現出し、爆発を防いだ。

続けて何回撃つても、壁にふさがれ続ける。

「グラビレイ!!!」

少女が叫ぶと、介旅の身体は重力により地面に押し付けられた。

介旅に抵抗するチカラはもう無かった。

「ハハ、いつも、こうだ。何をやってもチカラにねじ伏せられる…

…」

介旅は独りよがりな言葉をもらす。  
続けて憎しみに満ちた戯れ言を放ち続ける。

「お前みたいなのが、いるから悪いんだ！！　チカラのあるヤツなんて、みんなそうだろうがアア！！！！！」

少女は介旅の胸ぐらを掴み、思いっきり殴った。

彼女の腕力は凄まじく、介旅の細い身体はボールのように転がる。

歯が一本抜け落ちた。

「な、何をする……」

「うるせえっ！！！」

引き裂くような怒号に、介旅の身体が強張る。  
鬼神の怒りでも、もう少し温和なくらいだ。

「お前のせいで……。あの子が死ぬところだったんだぞ！」

しかし、少女の憤怒の根元には悲哀があった。

「結局、お前は自分のチカラで人を叩きつけてんじゃないか……」

介旅は、少女の言葉に自分の所業を思い返す。

己の憎む行為を己自身が行っていた、この矛盾。

「だったら……」

介旅は噛み締めるような言葉を紡ぐ。

「だったら僕はどうすればよかったんだ。ただ、僕はチカラに屈し  
たくなかったただけなんだ……」

文面だけなら、自分勝手な言葉だろう。

しかし、不思議とその言葉は彼の言葉の中で唯一共感し得る言葉だ  
った。

「……じゃあ、俺が守るよ」

少女の発言に再び、介旅は驚愕する。

それは、思いつきでいえる言葉じゃない。

「もしも、チカラを振りかざして他人を食い潰すような奴がいたら、  
俺が守るから、味方になるから」

介旅初矢の目から一筋の涙があふれた。

そんな、彼の頭を少女のか細い指で撫でる。

ふと、少女はなにかを思いつく。

「ケータイ貸して」

言われるがままに携帯を取り出すと、なにやらアドレスが送られて  
きた。

「これは……」

「これで、キミに困ったことがあったときは、わたしにメールをしてね」

先ほどとは打って変わった、少女らしい口調で明るく返答した。それは、敵に向ける感情ではなく、友人に向ける感情だった。

「そんじゃね〜」

そう言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

「嵐のような子だったな……」

残された介旅は呟く。

「だけど、こんなに嬉しいのは久しぶりだ……」

携帯の画面には、少女の名前が表示されていた。

『衣川 晶』

**第四話・虚空爆破事件……だと……！？（後書き）**

ギャグで済ますはずが、シリアスになってしまった……。

次回からようやく、インデックスが出てくる予定です。

一つ言わせてもらおう。インデックスは聖母であると。

**第五話・ようやく禁書目録がスタートしたぜ（前書き）**

PV10000を超えました！やったね！

これも、皆様のおかげです。ありがとうございます！！

さあ、今回は予告通りインデックスさんが登場します。

## 第五話：ようやく禁書目録がスタートしたぜ

「夏休みだああああ!!」

七月二十日 早朝

俺は布団の中で、声高に夏休み宣言をしていた。

ほら、目が覚めたときに「あ、そっいや今日休みだな」と気付いたとき、何か勝ったような気分になるのが分からないかな。

別段、補修があるわけではないので、学校はない。

という事で今日は夕方まで眠ることにしよう。  
今回の話はこれでお終いだ。

.....。  
.....。わかったよ。

ちゃんと、ストーリーを進めますから。  
帰らないで。ね、ね。

今日は、インデックスと上条が出会う、運命の日だ。そして、夕方

には我が寮の廊下で、炎の魔術師ステイル「マグヌスとの闘いがある。

もちろん、俺も参戦するつもりだ。

そのためには色々下準備をしないとイケない。

早速取りかかるうとしたが、ふと異変に気付いた。

部屋が馬鹿に蒸し暑い。

基本的俺は、節電？ 何それ、おいしいの？ と考えている人間なので、クーラーは全力でつけまくっている。

どうやら、停電でクーラーが止まってしまったようだ。

原因は、御坂が上条に向かって全力の落雷を出したからだろう。迷惑極まりない話である。

今度会ったら、腹パンでもしてやろうか。

「じゃあ、部屋を冷やしますかね」

ディーブ・フリーズ

氷碧眼で冷気を操り、部屋の中をキンキンに涼しくした。

これで避暑は万全。

さて……次は。

俺は玄関を出ると、寮の外廊下を見渡した。

この後、イノケンティウスに焼き尽くされるんだよね……。

懐から携帯を取り出し、とある番号に電話をかける。

すると、舌足らずな甘い

声が返ってきた。

『は〜い。みんなの神様ですよー』

「よお。仕事ミスってるか」

『その声は昴さんじゃないですか。てか、あれ以来まだ間違えて人を死なせたことはありませんよ!』

「まだだと!? オイ、ちょ……おま。ミスる予定でもあるのかよ!?」

二人目がこの世界に来るとか、マジでやめるよな。

まあいい。本題に移るとしようか。

「こつちに持ってきて欲しいモノがあるんだけど」

『何でしょうか。私のプロマイドでしょうか』

「ハガレンの『賢者の石』を百個よこせ」

『えええ!?!? 多すぎ、てか何に使うんですか!?!?!?』

「つべこべ言わずにさっさとよこせ。お前なら、国土錬成しなくても造れるだろ」

『まあ、出来ますけど。……チートのくせにうるさいやい。』

俺だってやりたいことがあるんだよ。

というか、神に対して上から目線の俺って何様よ。

『はいはい。玄関の前に置いておきましたよ』

指定の場所にはダンボールが置いてあり、中には赤い宝石みたいな

『賢者の石』があった。サンクス神様。

『じゃあ、もう切っていいですか』

「どうぞ」

『……引き留めてくださいよ』

面倒臭い神様だな、おい。まあ、仕事とかで忙しそうだし結構寂しいのかな。

「わかったわかった。暇なときは電話してやるし、この世界が終わったら、しばらく手伝ってやるからさ」

俺の台詞の後、数秒の沈黙が返ってきた。

『約束ですよ……』

「大丈夫だ。問題ない」

お決まりの台詞を言って、俺は電源を切る。

一応俺は約束は守る元男なので安心しろ。

用件は済んだので、俺は早速作業に取りかかる。

「さて、錬金錬金」

スタイルと闘う際に、どう立ち回るかは、その場のノリだが、一つ

懸念していることがある。

この前の虚空爆破事件クラフトンのときに、俺はついつい『黒鐵クロガネ』をぶっ放した。それで、その後被害状況をググってみたところ、デパートの天井や床が半壊して、修繕の最中らしい。

つまるところ、多分次は調子に乗って、寮を瓦礫の山に変えてしま  
いそうなのだ。

だから、錬金術で寮を要塞化することにした。

俺はクレインゲームにコインを入れる間隔で、次々と賢者の石を消費する。

錬金術師が見たら血の涙を流すかもしれんな。

念には念を入れて、作戦名『いいぞお、その賢者の石で学生寮もろとも要塞にしてしまえー』を行っていると部屋から人が出てきた。その少女は、金色の刺繍が施された純白の修道服を着ているが、帽子をかぶっておらず、長い銀髪が露わになっている。ヒロイン・インデックスさんだ。

バタフライ効果を危惧していた俺だったが、ちゃんと上条に会ったようだな。

どれ、挨拶をしてやろう。

「インデックスやあ、禁書目録ちゃん。いやこう言うべきかな、イギリス清教ネ必セサリウス要悪の協会所属の、一〇万三〇〇〇冊の魔導書を持つシスター『Index - Librorum - Prohibitorum』」

途端にインデックスが警戒態勢をとる。

いやあ、愉快愉快。

「……あなた、魔術師？」  
インデックスは顔に似合わぬ声で俺に問う。  
追われている身だから当然だ。

「違うよ。俺はチートなだけの人間だ。魔術でも科学でもない」

俺の返答を信用仕切れず、警戒を解かないインデックスに対して、  
更に言う。

「脳内汚染される魔導書なんて要らないし、そもそも『お前らの言う魔術』は使えない。というか、君に手を出したら二つ以上の意味で俺の身が危ないぜ」

一応真実を告げた俺を、思案気に見つめていたが、インデックスの表情が緩んだ。

「うん。あなたからは魔術師っぽい感じがしないし、いい人そうだから信用できるかも」

良かった、ひとまず警戒を解いてくれたようだ。

「ところで、あなたの名前を教えてくださいかな」

「衣川晶だ」

「あきらだね。早速会ったばかりなんだけど、私教会に行かなきゃいけないんだ。だから、お別れなんだよ」

このとき、魔術を知っている俺に保護を頼むこともできただろうが、

インデックスは敢えてそうしない。やはり、自分の地獄に他人を巻き込むのはイヤなのだろう。

そんな彼女を前にして俺は思う。まさしく聖女ヒロインなのだ。

大丈夫。これから俺と上条が守るからな。

俺の心の中の決意に気づかず、インデックスは何処かへ行ってしまった。

なので、作戦名『いい（ry）』を続けることにしよう。

ところで閑話休題のだが、この前妹達シスターズを一人見かけた。ストーキングして実験を妨害しようかなと考えたが、止めにした。

一方通行を倒すのは、上条が行うべきだろうし、今現在学園都市上層部は俺をどう扱っているか解らアクセラレータないので、一方通行を倒しても、実験はストップしないかもしれない。

なので、上条が関わるまでこの案件をスルーすることにした。

聴きようによつては、妹達を見殺しシスターズにすると公言しているようだが、本来の世界で死ぬ運命の者を余りねじ曲げたくない。

スタンスとしては、物語に干渉はすれど大筋は変えない。

ただし、死ななくていい奴が死になつたら全力で守るし、その命を奪つたりはしない。

転生者として、一応のマナーのつもりだ。

と、まあ、ほぼ自己陶醉クラスのモノローグに浸っていると、携帯

が鳴りだした。  
着信音はまどマギの『コネクト』だ。

「はい、もしもし」

『衣川さんですか？ 黒子ですの』

「何だ、ホワイト・アンド・ブラック白と黒を兼ねし者か」

『変な渾名で呼ばないでくださいな。問題が発生しましたの』

「変なとは失礼ね。神から送られし転生者であるわたしの……」

『ああ、もう！！ 話の腰を折らないでください！ この前の事件の犯人である、介旅初矢が意識不明になりました……。詳しくは分からないのですが、警備員の取り調べ中に突然』

『初矢くんが！？』

そういやあ、忘れていた。俺のメル友（無理矢理）の介旅は、レベル幻想御手の弊害で意識不明になるんだったな。

ステイルをどうボコるか、考えていて忘れていたよ。

俺はアリバイブロック腑罪証明で、水穂機構病院に瞬間移動した。

しばらく待っていると黒子と御坂がやってきた。

なので、御坂に腹パンしといた。

御坂は腹を抑えて床にうずくまる。いやあ、気分がスカっとした。

「ぐへえ！？ な、何すんのよ」

「わたしのクーラー生活を妨げた仕返しよ。同じく熱帯夜で苦しんだ、学生達の恨みと思え」

「また、お姉様は無闇に停電を起こしましたのね。全く人様の迷惑を考えなさいな」

黒子が呆れたように呟いた。御坂に心酔しているとはいえ、そうと  
ころでは厳しいんだよな。

「うっさいわね！！ だって、あの馬鹿が……」

「次はアバラを折ってやろうか」

「は、はい。ごめんなさい！」

俺の殺気に、御坂は小鹿のように震えだした。

まあ、本人に悪気は無いようなので許してやろう。

医者から詳細を訊くと、原作通り今まで関わった事件の、アゴ髭や眉毛も意識不明になっているらしい。

まあ、自業自得とはいえ、<sup>レ</sup>愁傷様だ。

ふと、向こうから、白衣を着た女がやって来た。目の下にはクマが  
できている。  
女は名乗る。

「水穂機構病院院長から招聘を受けました　　木山春生です」

**第五話・ようやく禁書目録がスタートしたぜ（後書き）**

美琴ファンの皆さん、ごめんなさい。

みんなも、電気は大切にね（どの口が言う……）

## 第六話：教えて木山センセイ（前書き）

今回は超短いです。

ステイル戦も続けて書いていたのですが、ややこくなるので分割しました。

## 第六話：教えて木山センセイ

俺と御坂、黒子、そして木山先生はファミレスの一席を陣取っていた。

「先ほどの話の続きだが……」

木山先生は開口一番、

「何故、同程度の露出で水着はいいのに下着は駄目なのか……」

「いや、そつちではなく……」

御坂と黒子が、ほぼ同じタイミングでツッコミを入れた。息が合いすぎて、逆に怖い。

「ぶつちやけ、薄着の方が涼しいツスよ。ほら、すきま風的な感じ  
で。あ、サーロインステーキくださいーい」

「アンタは全力で黙れ」

御坂に恐ろしい顔でツッコまれちゃった。

いや、でも薄着ってよくない？ 着る方も見る方も癒され 自重  
しよう。

おバカトークはこれくらいにしておいて、俺と黒子で幻想御手レベルアップについて木山先生に説明をする。

「君達は、それが昏睡した学生達に関係しているのではないか、と」  
木山先生は、それらしい反応をするが、ぶっちゃけネタバレると製作者兼流布者は木山先生なんだよな。

動機が動機なので、別段不快ではない。むしろ、協力してしまいそうなくらいだ。

「能力を向上させるということは、脳に干渉していると思われまレベルアップすの。なので、幻想御手が見つかったら、専門家である木山先生にと」

「むしろ私から協力したいくらいだよ。大脳生理学者として興味がある。……ところで、さつきから気になっていたんだが、あの子達は知り合いかね？」

外を見ると、初春と佐天が外ガラスに張り付いていた。

「へえ、大脳生理学者の先生なんですかあ。まさかっ！ 白井さんの脳に異常が……！」

「違いますの」

早速、黒春全開な初春が話に交わる。佐天はプリンを注文して食べていた。俺もステーキを食い終わったところだ。

「ああ、それなら……」

佐天は懐からモノを取りだそうとしたが、

「黒子が言うには、レベルアップ幻想御手の所有者を保護するんだって」

タイミングの悪すぎる、御坂の言葉に、佐天は音楽プレイヤーを咄嗟に隠した。

別に大丈夫だとは思うけど、レベルアップ幻想御手を手に入れたなんて言えないしな。

「えー。別にレベルを上げること自体は悪いことじゃない？」

俺の言葉に白井が、

「不正とはいえ、噂に過ぎないレベルアップ幻想御手の使用は犯罪ではないのですが、あなたもご存知の通り使用者には副作用が出る可能性がありますの」

「まあ、脳に障害が起きて言語や歩行に障害ができるかもしれないし、下手すれば一生意識不明になるかもしれないしね。ていうか、レベル私無能力者だけど超能力なんて、そこまでして手に入れる価値ないし」

当てこすりかと思うくらいに、レベルアップ幻想御手を使いたくなくなるようなことを言う俺。

それもこれも、佐天のコンプレックスを緩和して、軽拳な行動に走らせないためだ。

現に佐天はさっきからうつむいたままだである。

そのせいだろうか。佐天が飲み物を零して、木山先生のストリップショー！なんてことにはならなかった。くそ。痛恨のミスだ……。

「じゃあ、私はこれで。教鞭を執っていた頃を思い出して楽しかったよ」

そう言つて木山先生が帰ると、俺達も解散することにした。

佐天はいつの間にかどこかに消えて、御坂も佐天を探しにいらなくなつたのだが、完全にスルー！。

俺にはやるべきことが、あるからな。

**第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります（前書き）**

暇なので本日二回目の投稿をしました。  
タイトル通り、ステイルと闘います。

## 第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります

木山先生と話したあと、のんびりと歩いて学生寮に帰宅すると、廊下には見覚えのある影があった。

一人は上条で、大柄で赤髪なもう一人は魔術師ステイル<sup>II</sup>マグヌスだ。

ステイルの背後には、血まみれのインデックスが倒れていた。

いくらミスったとは言え、親友にそんなことすんじゃねえよ神裂さんよー。

どうせ陰で自虐モードに入っているのだろう。

「さて、楽しい楽しいショウタイムといきますかな」

階段を上っていると上条のとステイルの話し声が聞こえてきた。

「何だよ……。何をビビってたんだ。超能力を消せるなら魔術だった消せるに決まっているじゃねえか」

「なるほどね。不思議には思っていたんだ。どうして『歩く教会』が破壊されていたのか……」

どうやら、ステイルの炎剣を幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>して消したところらしい。タイミング的に都合だ。

そのまま俺は廊下に着いたが、まだ二人は気づかない。

「おっはー。当麻くん喧嘩してんの」

微塵も空気を読まずに、俺は声をかけた。

上条とステイルは驚いたように、こちらを振り向く。いやあ、照れるって。

「衣川　　っ！？　馬鹿野郎！　危ないからここから今すぐ離れろ  
！！」

上条が鬼気迫る表情で常識的な反応をする。

それに対して、俺は相も変わらぬ明るい調子で、

「その人魔術師でしょ。見りゃあ分かるもん」

「「なっ！？」」

再び驚愕する上条とステイル。

そりゃあそりゃ。片や同級生、片やただの一般人がいきなり出てきて、関係者だったら誰でも驚くわ。

「……………衣川、お前、魔術師……………なのか？」

「正確には違うけど、まあそんな認識でいいよ」

そう言うと、インデックスの身体と俺の目の前に空間を作り。

「データウンロー」

トリック・ルームでインデックスをこちらに瞬間移動させた。

口が開いたままの二人を尻目に、インデックスを担ぎ上条にパスをする。

「当麻くん。インデックスを連れて、そこいらの公園にでも隠れていて」

「お前はどつするんだよ……」

「ソイツと闘つよ」

当然上条は、仲間を置いて自分だけ逃げるのが許せないらしく、反論する。

「そんなこと、できるかよ！ お前が闘つなら俺も……」

「今はインデックスを助ける方が先でしょう」

俺の言葉に上条は何も言い返せなかった。

そのまま俺は励ますような調子で、

「大丈夫、大丈夫。こいつは雑魚だからさ、五分で倒せるよ。ここは俺に任せて先に行け」

「死ぬなよ……」

「当たり前」

互いに約束をして、上条はインデックスを背負って階段を駆け降りた。

「クツ、逃がすと思うかい!!」

ステイルは上条を追おうと、階段へ向かう。

俺はステイルの目の前に手をやり、それを制した。

「何の真似だ……」

「こっから先は、通行止めよ」

某夢喰いの台詞をパクりながら、ステイルに拳を向ける。

ステイルは呆れたように、そして忌々しそうに呟く。

「どこの魔術師か知らないが、僕の邪魔をするなら容赦なんてしないよ」

「ハン！ ネセサリウス必要悪の教会の犬ごときが、この俺に勝てると思っているのか」

ハッキリ言って、ネセサリウス魔術師が必要悪の教会を雑魚と言うのは、軍隊相手に一人で挑むくらい馬鹿馬鹿しい暴挙らしい。

その証拠に、ステイルはスプーキーを見るような目で、嘲りに満ちた苦笑いを浮かべていた。

煙草の煙を口から吐き出すと、

「やれやれ。腕に相当自信があるらしいが、必要悪ほくたちの教会をなめない方がいい」

まるで俺が小者みたいな状況だが、こちらとしては闘いたくてウズウズしているのだ。

俺はステイルを挑発するようにわざとらしく、

「なんで同僚の命を狙うのか俺には理解できないね。あれか、イギリス清教にとつちや頭の魔導書さえ無事なら良いのかい？」

悪役度マックスな俺のセリフを受け、ステイルの顔が憤怒に染まる。そして吼える。

「君には、関係の無い話だっ!!」

ステイルは煙草を宙に投げ捨て、魔術を発動させた。ステイルの周囲が熱を帯びた紅蓮の炎に包まれる。そして、身体に纏われた炎が俺に向かって、突き殺すような勢いで飛んできた。

「ほれ」

それを『カガミムシ』で反射した。

「なっ!」

軌道を変えて自分に跳ね返ってきた炎を、手で風払い打ち消す。

ステイルは息を整えて、言つべき感想を漏らした。

「どうやら口だけではないらしいね。僕には、あの少年同様恐ろしい奴に見えるよ」

それに対し、俺は謙遜とは呼べない謙遜をした。

「まだ奥の手を隠しているよなステイル」マグヌス。出して見ろよ、イノケンティウス魔女狩りの王を」

「やれやれ……。どうやら僕の手札は見透かしているようだね。じやあ、お望み通り……」

ルーンの魔術師が真価を発揮するときが来た。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える

不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

マントの下から、さながら暴風雨のごとくルーンのカードが展開され、周囲に配置される。

そして!!

「イノケンティウス魔女狩りの王！」

かけ声に応じ、ルーンの中央から泥のように溶け出した細長い炎の巨人が召喚される。

俺は笑みを抑えきれない。多分、端から見れば邪悪極まりない顔をしていると思う。

「そうこなくちゃ、鬭りがいけないぜ」

俺は懐から刀を取り出し、身体中から炎を展開する。

これは、血液を高温の業火に変える悪魔の力だ。自分の血液を使う、諸刃の剣な能力だが、再生能力を持つ俺には関係ないし、酷使による『非在化』の心配もない。

「消える！」

イノケンティウスにを刀で斬りつけ、爆炎で吹き飛ばす。

膨大な魔力を持つ俺の攻撃に押し負け、イノケンティウスが消える。

しかし、

イノケンティウスは俺の背後で何事も無かったかのように、瞬間的に再生された。

『イノケンティウス魔女狩りの王』の特性として、ルーンがある限り何度でも爆発と再生を繰り返す。ルーンを取り除かない限り、イマジンプレイカー幻想殺してもかなわない。

後、ドヤ顔でこっちを見ているスタイルが正直イラっとくる。三増で、ぼこることにした。

俺は刀を構え、イノケンティウスを見据える。

「心月流抜刀術 壺式 破岩 菊一文字！」

刀を振り抜くとともに、イノケンティウスを居合い斬りした。再びイノケンティウスが、真つ二つに割れる。

「はっ」

しかし、ステイルは何やっているんだと言わんばかりに嘲嗤う。

「何度やっても無駄さ。イノケンティウス 魔女狩りの王は不死身だ。さあ、そろそろ終わりにしようか」

ルーンの魔術師ステイルイノケンティウスは、魔女狩りの王に命ずる。

「 殺せ」

命令と共に、イノケンティウス 魔女狩りの王は再生し、俺を灰に焼き尽くす

ハズだった

「イノケンティウス……！？」

だが、イノケンティウスは復活することなく消えたままだった。

「イノケンティウス！？ イノケンティウス！！ おい、出てくるんだ……！！」

ステイルの叫びは虚しく、イノケンティウスは、もう復活しない。

ステイルは脂汗を浮かべ、掴みかからん勢いで、俺に問う。

「一体なにをした……！？まさか、君の術か……」

「万物には全て綻びがある。俺の『直死の魔眼』は、モノの死を視ることができるんだよ。だから」

俺は冷淡にステイルを見つめて言い放つ。

「生きているのなら、神さまだって殺してみせる」

廊下を駆け抜ける。

ステイルは炎剣を放つが、全て焼き斬った。

俺は目の前の、ステイルの顔に手を当てて呟く。

「<sup>アルト</sup>制止」

途端にステイルの動きが止まった。

「な、身体が……！？」

「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」

解号に応じて刀身が燃えだし、天を焦がすほどの火が更に発生する。さすが総隊長の斬魂刀。

「さて、と」

俺はデモ―ニツシユな笑みを浮かべる。

同時に刀から焰の竜巻が発生し、一閃。そのまま刀を振り抜く。

「火産靈神かぐつち！！」

渦に吞まれたステイルの身体が業火に包まれる。天井まで伸びた火柱が焼き尽くす。

そして炎が収まった跡には、気絶したステイルが倒れていた。

ルーンの魔術師ステイル＝マグヌスの敗北が決定した瞬間である。

「一応、死なない程度にはやっておいたぜ」

オーバーキルすぎる気もしたが、命に関わりそうな傷だけ大嘘憑きオールフィクションしておいたので、大丈夫だろう。

服が燃えて、ほぼ全裸だが気にしない。しかし、あんなに派手に燃やしたのに寮は全く壊れていない。

流石、賢者の石製要塞男子寮。

どうせ、神裂が回収するだろうからステイル（ほぼ全裸）は放置して、上条のところへ向かうことにした。

上条の携帯に連絡してみると、原作通り小萌先生の家にいるらしい。

お馴染みの腑罪証明<sup>アリバイブロック</sup>で、小萌先生のアパートの前に移動した。

一室の扉を開けると、上条とインデックス、そしてウサちゃんパジヤマの小萌先生がいた。

乱入してきた俺に小萌先生が驚く。

「衣川ちゃん！？ 一体どうしたんですか」

「衣川っ！！ 大丈夫なのか！！！！」

二人一斉に大声を出すな、近所迷惑になる。

「大丈夫って言ったでしょ。それより、インデックスは？」

「ああ、今から小萌先生に協力して貰って傷を癒すことに……」

「その必要はないわ」

某魔法少女のように、上条を制すると、インデックスの周囲を盾で包み込んだ。

「一体なにを……」

「双天帰盾。私は拒絶する」

インデックスの傷が見る間に癒されていき、治療が終了する。

三人とも仰天で目を丸くした。

傷の治ったインデックスが言う。

「今の術式は、私の魔導書でもそれらしい記述がないんだよ。こんな滅茶苦茶な術式は初めてかも……」

当たり前だ。事象の拒絶なんて解るはずがないもん。

明日も幻想御手の調査する予定なので、そうそうに立ち去ろうとした。  
レベルアップ

すると、上条が「待てよ」と呼び止めた。マズい、また尋問されるのか。

しかし、上条が言ったことは違うことで当たり前のことだった。

「ありがとな。お前が守ってくれなかったら、インデックスを助けられなかったかもしれない」

「……………うん」

なんか上条を直視できなくなった俺は、そっぽを向く。

「あらら」

苦笑いで頭をかく上条に、言いたいことだけ言って帰ることにした。

「また、助けるから。覚悟してよ……」

「覚悟するぜ」

わざと小声で呟いたが、上条に聞こえてしまったので、ついつい扉を乱暴に閉めて、すぐさま外に出て行く。

今日は無性に走って帰りたくなった。

第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります（後書き）

果たして衣川ちゃんは誰ルートに行くのでしょうか。  
周りの希望に添って決めようかと思えます。

- ・ 上条ルート
- ・ 一方通行ルート
- ・ 浜面ルート
- ・ インデックスルート
- ・ 美琴ルート
- ・ 黒子ルート

みたいな。

第八話：いいから幻想御手だ！（前書き）

文化祭やらで更新が遅れちゃいました。  
今回は衣川ちゃんがトリックと闘います。

## 第八話：いいから幻想御手だ！

夏の日差しが肌を否応なしに照りつける、七月二十一日。

俺は風紀委員ジャッジメント一七七支部で、のんきに椅子に座ってくつろいでいた。

初春や黒子は幻想御手レベルアップの件で忙しいらしく、あたふたと支部内を駆け回っているが、俺はそんなこと気にせずにゲームをやっている。

「黒子ちゃん、お茶くんでー」

図々しく飲み物を要求する俺に、黒子はため息を吐く。

「あのですね。ここは風紀委員ジャッジメントの支部であって、喫茶店じゃありませんの。暇なら他へ行ってくださいな」

「え〜いいじゃん。昨日はゴタゴタがあって疲れていたんだよ」

口ではそう言いながらも、俺は内心ほくそ笑んでいた。昨日のステイル（裸）を思い出すと……ぷぷっ。

写メ撮っておけばよかったな。

「そういえば、昨日あなたの学生寮で火事がありましたよね。もしかして、そのことですか？」

「そうそうソレソレ。やっぱり外からみてもスゴかったかしら」

愛想良く笑う俺だったが、黒子はどうと。

「……外から？ まさか……」

訝しげに思案を始め、険しい表情で俺を睨んでいた。

俺はまたドジを踏んだらしい。

俺って、ほんとバカ。

「よし、用事を思い出したし帰るとする……」

「衣川さん」

ゲームの電源を切り逃走を決行したが、黒子の声に止められ失敗。また、このパターンかよ。

錆びた歯車のように首を回転させると、視界には悪鬼のような笑顔の黒子が写っていた。

そうして一言。

「少々お喋りいたしませんか？」

「ひゃ……はい」

俺には拒否権のきよの字もなかった。

今現在、俺はソファに座って黒子からザ・尋問を受けていた。

「単刀直入に言いますと、あなたは昨日のボヤ騒ぎに関与していませんわね」

「……ぴゅーぴゅー」

ごまかそうと、口笛を吹く。

「マジメに聞いてくださいな……」

が、黒子に半目で睨まれたので自重した。目が人を殺るレベルになっ  
つていて怖いわ。

「で、何でわたしが疑われているわけ……?」

「怪しいすぎるからですの」

即答しおった。

そして失礼だ。

前々から思っていたが、御坂と黒子は俺に謎の不信感を抱いている  
っばいな。

車に釘パンチをぶち込んで吹っ飛ばしたり、落書きを魔法の聖水  
オールフィクション  
実は大嘘憑きで消したり、爆弾を鐵の重力波で止めたりしただけ  
クロガネ  
で、別段疑念をもたれるようなことをした覚えはないけどなあ。

「それと、もう一つ」

そう言うと、黒子はテーブルの上に数枚の写真を置いた。  
写真には、見慣れた男子学生寮が写っている。

昨日の火事現場らしい。

「先程あなたは凄い火事だと言いましたよね」

黒子は一旦呼吸をおき、

「で・す・が」

写真の何点かを指でなぞり強調する。そこには別段変わったところ  
はない。だが。

「どこも壊れておらず、あまつさえ燃え跡すら残っておりませんの  
よ。不思議だとは思いませんか？」

どこか挑戦的に妖艶スマイルを俺に向ける黒子。

「あと、監視カメラも全て壊れていたそうでした、それについても  
意見を、お伺いしたいですわね」

つまり黒子が言いたいのは お前がやったんだろ



黒子は俺の邪推に、ハッキリ肯定を示した。  
下手に隠そうとしないところには、好感が持てるな。  
構わず俺は続ける。

「別にいいわよ。自分の潔白ぐらい証明できるわ」

あ、要塞化の件は別な。

「ヒントは三つ」

俺は某探偵Qよろしく、三本指をたてる。  
自分が犯人なのに探偵気取りの衣川さんだ。

「わたしは事件があった時間は外にいたわ。つまり、私は犯行不可  
能!」

「さっき中にいるって言いましたよね」

「二つ目!」

「ちょっと……。スルーしないでくださいな」

「更に言えば、そのときは友達と電話をしていたわ!」

「電話をしながらやったという可能性は、あなたの頭に無いんです  
の?」

黒子がうだうだウルサイが無視無視。

「そしてニイイイイイつつ目エエエえ!!!!!!」

力を込めて雄叫び、髪をクールに払う。あらカッコいい。

濡れ衣を払うべく、最後の推理を華麗に愉快に綺麗に豪快に盛大に偉大に宣言した（形容詞過多）。

「だって、犯人知っているんだもん」

そのとき、世界が凍結した。

「あの……衣川さん」

黒子がおずおずと口を開ける。

「今とんでもない爆弾発言をしましたよね……」  
推理もクソも無かった。

ことあるごとに、御坂や黒子の追究を避けているが、正直いって面倒になったのだ。

だったら、ある程度のことを言っただけで黙らせようではないか。

「ちなみに放火犯ボコったのは、わたしよ」

「だったらどうして風紀委員シャッジメントに通報しませんの!? 第一、一般人の暴力の行使は犯罪ですわ!!!」

黒子は声を荒げ、両手で激しく机を叩く。その振動が、空気を通して俺の肌に伝わる。

おう怖い怖い。

「でもさー。通報しようが、わたしを逮捕しようが直ぐに無かったことにされちゃうんだよね」

「なっ！ それはどういう……」

黒子は予想外のことには絶句する。さっきの迫力は何処へいったのか、俺に対し押され気味だ。

「放火魔は外部からのVIPで、わたしはVIPの対応役ってこと。アンダスタン？」

対応役もなにも俺が勝手に決めただけだがな。

黒子はまだ納得がいかないようで、尋問の刃を納めないで、

「ノットアンダスタンですの。あなたの言っていることは支離滅裂ですし、たとえ本当のことだとしても、どうして一介の学生であるあなたが外部の人間と接触できますの……？」

「えー。学園都市って学生に、結構真っ黒なことをさせているんだぜ。いわゆる暗部ってやつね」

「……そんな」

ちよつと刺激が強すぎたかな。この文面だと俺が暗部に属しているみたいだし。

俺は席を立ち上がり、ドアの方へと向かう。

ある程度の闇をちらつかせておけば、俺の正体に首を突っ込む真似は控えてくれるだろう。

「じゃあね黒子ちゃん。わたし、ダイジなダイジな用事があるから帰るわね」

軽く言い放ち、俺はドアノブを捻った。

しかし、廊下に出た途端、空間移動した黒子に前を遮られた。

「だ・か・ら。まだお話は終わっていないと申しておりますわよ」

「やれやれ。思った以上にしつこいやつだ」

俺は呆れたように肩をすくめた。

適当なことを言っつて、追い払おうとしたのは失礼だったかな。

「あなたがおっしゃる黒を、暴いて正すのが風紀委員ジャッジメントの仕事ですの。そうそう簡単に諦めたりはしませんわ」

黒子の目は、獲物を狙う矢のように鋭く輝いている。ちょっとした闇では隠せそうにもない輝きだ。

「わかったわ。降参する」

俺はおずおずと両手をあげる。

多少ばかり方針を変えることにした。

「レベルアップ幻想御手の取引場所。教えてあげる」

人通りの少ない道端で、俺と黒子は仲良く？歩いていた。

「本当に取引現場を知っているんですの？」

若干の疑いを込め、黒子が問いかけた。  
対して俺はにこりと微笑んでいる。

「飾利ちゃんリークの情報とも一致しているでしょ。信頼出来る筋の情報だから、信頼しなつて」

信頼もなにも、これから起こる予定のことだけど。

「わたくしとしては、その筋とやらを、大いに問い詰めたいところですよ」

何だかんだお喋りをしていると目的地に到達した。

そこで一人の少女が、不良に三人がかりで囲まれていた。

佐天涙子は壁際に追い詰められて震えている。

不良からバナナマン日村みたいな少年（盾なんたらさん）を庇ったのだろう。

「佐天さん!？」

佐天に気づいた黒子が駆けつける。俺も後に続いた。

不良のリーダーらしき歯抜けが、力の無い佐天を罵倒している。  
マジでうぜえな。

なので空き缶を拾って、取り巻きの一人にメジャーリーガーもビツクリな速度で投げつけた。

「がはっ」

そのまま頭に直撃し不良が地面に倒れ込む。  
頭から血が出ているが、軽い怪我だろう。

「んだ、てめえ！」

さっきのを不良Aとすると、不良Bが念動力で瓦礫を飛ばしてきた。  
それを黒子は空間移動テレポルトで回避し、俺は響転ソニートでよけた。

そのまま不良Bの目の前に転移した黒子が、顔面にカバンを叩きつけ不良Bを撃破する。

「面白え能力だな」

リーダーの歯抜けが不敵に笑う。いかにもな極悪面だ。

「空間移動テレポルトに、よくわからんが肉体強化系の能力者か。初めて見たぜ」

「他人事のように仰いますけど、次はあなたの番ですよ」

余裕を崩さない黒子に歯抜けは忌々しそうに呟く。

「俺達はよお……。幻想御手レベルアップを手に入れる前は、お前ら風紀委員ジャッジメントにビクビクしていたんだ。だからデカい力が手に入ったら、お前らをギタンギタンに……」

「うるさい黙れ」

長いので歯抜けの顔面に向かってアッパーを放った。だが、

「消えたっ!?!」

黒子が声を上げる。アッパーは歯抜けに届くことはなく、歯抜けは煙のように姿を消した。

「一体どこに……」

「黒子ちゃん後ろ!?!」

歯抜けは黒子の後ろに回り込んで、今まさに黒子に飛びかかろうとしていた。

「ちいっ」

仕方がないので俺が盾になる形で黒子を庇う。歯抜けのキックを喰らい、俺の身体が吹っ飛ぶ。

「衣川さんっ!」

「いい感触だったぜ。あばらの二、三本も折れたかな」  
折れてねえよ。

ジェット機と衝突しても死なないことに定評のある衣川さんが、そんな歯抜けキックにやられるわけねえだろ。

俺は心配する黒子と佐天をよそに起きあがると、歯抜けの顔面をぶん殴った。

今度は外さずに。

「がはっ……。な、なんで」

突然の激痛に歯抜けは態度を一変させ狼狽する。

それに俺は飄々と答えた。

「どうも光を逸らして目くらましをしているようだけど。視覚がダメなら他の感覚に頼ればいいじゃない」

歯抜けの能力、トリックうんたらは視覚を誤魔化している。なので五感をリンクさせた、『共感覚』で歯抜けの正確な位置を特定したのだ。

いやあ実に便利だ。

ただ殴るだけじゃつまらないので、能力自体を封じることにした。

「食らえ！ 鼻毛真拳奥義……」

「一体何をする気ですの……？」

「スーパーフラッシュュー！！」

「いや、これただの電気スタンドを出しただけじゃないですか!？」  
佐天が声高らかにつつこむが無視。  
俺の放った光に歯抜けの能力が打ち消された。

「くっ」

「あなたも、そんな技をまともに受けしないでくださいな!？」

歯抜けにつつこみを入れつつ、黒子は空間移動テレポートで確保した。

黒子が歯抜けを問い詰めたところ、レベルアップ幻想御手は音楽ソフトであると判明した。

ふと、佐天がぺこりと頭を下げてきた。先程の礼らしい。

「あの、衣川さん。また助けられてありがとうございます」

「いいのいいの。パンツ一枚くれるだけで十分よ」

「自重してくださいよ!」

「ハッハッハッハ」

そう言いながら俺は佐天の頭を撫でた。

佐天の方が背高いけど。

何はともあれ、インデックス禁書目録レベルアップに幻想御手と面白くなってきたな。

第八話：いいから幻想御手だ！（後書き）

文章を読めば分かると思いますが、今シユタゲにはまっています。  
夏だなー（あんま関係ない）。

## 主人公設定（前書き）

主人公設定です。  
特にネタバレはありません。

## 主人公設定

名前

きぬかわ あきり  
衣川晶

性別\*女(元男)

年齢\*15歳

身長\*160

体重\*46

スリーサイズ

B84 W58 H90

容姿

黒髪のショートヘア

虚空爆破事件以降は、赤いマフラーを首に巻いている。理由はカッ  
コイいから。

性格

元男だが、普段は猫かぶっている。特に男の前では。  
ただし、敵の前やキレたときは簡単に素に戻る。

基本的にドS。ワザと手加減をしながら、相手より一つ上の力で痛  
ぶりたがるフリーザ様思考。

一度死んだせいか、人を殺すことは嫌う。  
でも、半殺しや精神破壊はOKな人だから凄く微妙。

若干チキンなので、変なところで用意周到。けど、変なところでミス  
を犯す。  
要はバカ。

アニメやドラマの影響を受けやすいため、セリフや地の文で顕著に  
表れる。

最近では、某狂気のマッドサイエンティストの影響で、厨二行動が目  
立つ。

あと、セクハラ発言も多い。

能力

あらゆる作品の技や能力、武器を自在に使うことができる。

あまりにも多すぎるので、能力自体は省略するが、マイナス過負荷やアスラ・マキ機巧魔  
神、リナ斬魂刀を使うことが（多分）多い。

身体能力は聖人並み。あくまでも『普通の聖人』クラスなので、実  
は神裂やアツクアより膂力は劣る。とはいえ超サイヤ人のような変  
身や、後述の再生能力があるため余り意味がない。

Fateの十二の試練コトトハやトいつ天の毒まじゆにより、命のストックを大量に  
持つ。

更に、ハガレンの賢者の石を体内に入れているので、ミンチにな  
るうが、愉快的死体オブジェになるうが、人肉プラネタリウムになるうが、  
五臓六腑をシエイクオールイクシオンされようが、何度でも再生する。

例え死んでも、大嘘憑きで復活するから、神様でない限り衣川を殺  
すことはできない。

身の上

上条と同じ高校の同級生。女だが、男子学生寮で暮らしている。

一応は無能力者の肉体再生で、置き去りとされている。  
レベル。オートリパース チャイルドエラー

上条やインデックスのような魔術関係者には、学園都市に潜入したフリーの魔術師を自称する。

ただし、（禁書世界での）魔力やAIM拡散力場がないので、一部の人にバレバレ。いざという時は、幻術や『鏡花水月』で誤魔化している。

御坂とも交友関係を持ち、しょっちゅう（衣川が）絡む。基本的にお姉さんキャラとして関係は良好だが、不可解な行動（ほぼ衣川のミス）が多いので、御坂や黒子に怪しまれている。

特に上条絡みで、御坂に敵視されることもしばしば。

アレイスターに目を付けられているものの、現在（幻想御手事件辺り）は保留ということにされている。。

衣川的には今は、原作ブレイクしない範囲での原作介入を心掛けている。ただし、『神の右席』『暗部』系統は知らんとのこと。

第九話：不良掃除とオリキャラ登場（前書き）

更新が遅くなりました……。

その割には余り本編に関わっていません。

## 第九話：不良掃除とオリキャラ登場

歯抜けから、レベルアップバー幻想御手について善意（？）の情報を受け取った、黒子とプラス（俺と佐天）は、ジャックジメント風紀委員の支部にいた。  
今は初春が、レベルアップバーネット上から幻想御手のファイルを探している。

その間、俺・佐天・黒子はテケトーに談話をしていた。

「まさか、レベルアップバー幻想御手が音楽ファイルで、ネット上で普通に一回っていたとは……。正直、無駄な骨を折った気がしますの」

黒子は椅子にもたれながら、肩を落としていた。

「H A H A H A ！ 情報が入っただけで一步前進だよ。まあ、欲を言えば、もうちょい早く誰かが見つけてくれて、あまつさえ教えられれば良かったんだけどね」

「そこまで都合のいい話があるなら、誰も苦労はしませんの」  
無駄にテンションが高い俺に対して、黒子はジト目を向けていた。  
対して、佐天は妙に気まずそうな感じで拳動不審だ。

佐天がレベルアップバー幻想御手を持っていることを隠しているのを、俺は知ってる。  
ちよっと意地悪をしたら、すぐに反応しおった。  
クククク。罪悪感が、温泉のように湧いてくるだろう、ええ。

ことが進むまでに、貴様の口から吐かせてやる。

「完了しましたー！」

下劣な思惑を張り巡らしていると、初春が作業を終えました宣言をした。

「フウーハツハツハツ！ よくやったぞ。流石、スーパーハカーだな」

俺は偉ぶった態度で、初春を讃える。黒子は汚物を見るような目で睨みやがった。おのれ、生意気なやつめ。

「スーパーハカーじゃなくて、スーパーハッカーと言ってくださいよ」

初春はどうでもいい点にツッコミを入れる。

あ、意味が分かるんですね。

さて、早速話を反らそう。

「あ、でも飾利ちゃんが、コレを使えば……」

「ハッ！ 白井さんに今までの仕返しが、あんなことや……」

「思考がただ漏れですよ」

にまにま笑いながら、黒子は初春の耳にイヤホンを差し込もうとする。

「わたくしに恨みを晴らしたいのでしたら、ぜひ」

「う、嘘です。うそですよー!!」

初春が必死で抵抗していると、携帯の着信音が鳴った。初春は助かったとばかりに、

「け、ケータイが鳴ってますよー」

まだお仕置きしたそうだった黒子だが、仕方なく携帯に耳を当てる。どうやら仕事のようだ。

レベルアップ  
幻想御手を使った学生が、暴れているらしい。

「初春は木山先生に連絡を。衣川さんは、わたくしといっしょに」

「ほいほい」

初春と佐天を置いて、二人で現場へと向かった。

ちなみに俺は黒子をの手伝いということで、ジャッジメント風紀委員の権限は黒子を通して使えるらしい。

渋々ながらも俺の実力を認めている、黒子としては俺を放置するよりは、近くに置いて監視をしていた方が良いと判断したのだろう。

つまりは、レベルアップ幻想御手使用者を公的にボコれるということだ。

素敵な展開に、心音が乱れに乱れている。

どんだけ溜まってんだ、俺。

「ハハッ！ どうだ、パワーアップしたオレの能力は！」

現場にいたスキンヘッドの不良に、黒子は早速吹き飛ばされた。

胴体をアスファルトに打ちつけてしまい、黒子の表情が苦痛に歪む。

「くっ……」

忌々しげに不良を睨みつけ、鋭利な鉄針を取り出した。しかし、俺は黒子の眼前に手のひらを置いて、反撃を遮る。

「ここは衣川さんに任せなさいって」

「ちょっと！ ここは、わたくしの仕事……」

黒子の制止に耳を傾けず、不良の正面に立つ俺。

ちなみに俺の顔は、『あんた絶対悪いこと企んでるでしょ』的な感じで、気持ち悪いくらいに

「そいやっ」

「ひでぶー！」

かけ声とともに、不良の顎を勢いよく蹴りつけた。

足を思いっきり上げたので、俺のスカートがめくれていたが気にしない。

不良は吹き矢のように、軽々と宙を舞う。

「はい終了。じゃあ次行こっか」

地面と不良が衝突する音を背景に、俺は黒子を促した。

次の現場の公園に向かうと、三人くらいの少年が能力を乱発して暴れていた。

発火能力が二人と、念動力が一人だ。

能力のせいで周りが滅茶苦茶になっており、野次馬が遠巻きに集まっている。

ガキ三匹は気味の悪い高笑いを上げていて、まともな状態じゃない。どんだけ、調子に乗ってんだよ……。

俺は黒子から、シャッジメント風紀委員の腕章を奪い取り、腕に装着した。

「おい、その三匹のDQN」

人混みをかき分けて、バカどもに声をかける。

「ああん？ 今ボクらスゲえ、忙しいんですけどお」

「シャッジメント風紀委員が何のようかなー」

「ゲフェフェエ。こんなお嬢ちゃんにシャッジメント風紀委員なんて、務まんの

「かあ」

「勝手の腕章を取らないでくださいな!!」

うぜえ。超うぜえ。テラうぜえ。

馬鹿みたいに笑うDQNの一人の顔面に、右ストレートをぶちまかす。

「が……はっ……!!」

そのまま近くにあった木に、ノーバウンドで吹っ飛んだ。

「この野郎!!」

二人目が怒りながら、念動力でベンチを投げつける。

避けようと思えば避けれたのだが、敢えて避けずにベンチにぶつかつた。

「ざまあみやがれ!!　これが幻想御手でパワーアップした俺の力だああああ!!!!」

勝利の雄叫びをあげているところ申し訳ないが、今受けたダメージエンカウンターを不慮の事故で少年に押し付けた。

「げふっ!?!」

少年の身体は突然ボロボロになり、頭から僅かに血が流れ出した。そのまま地に倒れ込む。

「おい!　いきなり……。な、なんだよコレ!!」

最後の一人が、半狂乱で叫んだ。先程のような狂喜ではなく、畏れに塗りつぶされた狂気だ。

そんな彼を隙ありと、足で蹴り飛ばした。

「紛い物ごときが、このチートを潰せるとでも思ったか」

俺は倒れた少年×3を木に縄で縛りつけた。

野次馬からは、驚嘆と賞賛の音が飛び交う。

あれ？ 意外と気分が良い。人から褒められるのも、悪くないかな、かな。

悦に入っている俺に向かって、黒子から怒鳴り声が飛んできた。

「勝手に人の腕章を取るんじゃないやありませんの！！」

「別にいいじゃん。アレが無いと、暴行罪になるし」

「前提からして補導ものですわよ……」

「キャンキャンうるさいなー。もう帰る！」

「あなたは子供ですよ！？」

見た目は女子高生、精神は小学生レベルだ。白井がグチグチ言うので、俺の小学生ハートが傷ついたじゃねえか。

「だっ！」と言いながら、俺は向こうに駆けていったが、

「お待ちくださいな」

「グエエエ!!」

白井に襟を掴まれて、俺は盛大に転んだ。顔に傷が付いたらどうするんだ!

「腕章をさり気なく持ち帰らないでくれませんか」

「バレたか!」

くそお!! どさくさに紛れて、腕章をパクろうとしたのに。そんなで風紀委員権限を使って、不良無双を始めようとしたのに!!

「魂胆が見え見えでしたわよ……。わたくしは取り締まりを続けま  
すので、衣川さんは大人しく待機してくださいな。くれぐれも、腕  
章も無しの暴行罪は働かないで欲しいですわ」

黒子は「それでは、ご機嫌よう」と言っテレポ  
ートて空間移動しやがった……。

あらかじめ釘を刺しておけば、監視せずとも俺が不用意な行動に走  
らないだろうと踏んだのだろう。  
逮捕されても、すぐ出られるって脅したのになあ。

「まあ、こつそり腕章を複製したんだけどな」

俺は片手にある風紀委員の腕章を弄ぶ。

「ククク、手ぬるいぞ白と黒を兼ねし者（ホワイト・アンド・ブラ  
ック）よ……。公的に暴力をふるわせて貰うぞ。風紀委員の権限を  
使ってなあ!!」

気味の悪い高笑いをあげながら、俺は腕章を腕に装着した。

何とか黒子から離れられたところで、俺は事件現場に向かった。いかにも不良がホイホイたむろしそうな、怪しさ満点の路地裏だ。散乱したゴミや落書きが、整備の至らなさを物語っている。

「どんなところでも汚れはあるってか。悲しいことだねー」

俺が心底どうでもいい感慨に耽っていると、不良どもが集まってきた。

二十人くらいで俺を包囲している。黒子から離れた途端、偉く増えたな。

まあ、雑魚は雑魚だが。

先手必勝とばかりに、不良が三人能力を放ってきた。全員、炎を操っている。

「ステイルの炎剣の方が、遥かに強いかな」

錬金術で、足下のアスファルトを錬成し、壁を造る。俺の周囲を壁が取り囲み、炎をガードする。

すると残りの不良どもが一斉に俺に向かって能力を放ち、一部身体

強化系らしき連中は俺に飛びかかった。

「あー鬱陶しいわ……」

適当に『絶界』を張った。

一応威力を弱めていたので、俺に近づいたバカ数名は壁に体を打ち付けたぐらいで済んだ。接近要員はくたばったが、遠距離勢はまだ諦めた様子ではない。

「格の違いつてのを見せてやるよ三流」

俺は喉を適当に鳴らすと、軽く呟いた。

「跪け」

「ぐおっ……!?!」

『言葉の重み』が発動され、不良共が全員土下座の体勢で地面に螺子伏せられた。ちよろいちよろい。

俺が悦に入っていると突然、

「へえ、面白い能力ね、ジャッジメント風紀委員さん」

聞き慣れない声が聞こえた。見ると一人の少女が立っている。小柄な体格で、髪は金髪のショートだ。原作に、こんなキャラはいなかったはず。

「自己紹介しよっか。わたしの名前は……」

「あ。モブの名前は別に聞きたくないですから」

「なっ！？ ひ、人をモブ扱いするなあ！！」

イヤイヤ。別に俺はオリキャラと変な因縁を持つ趣味ないし。名乗られたら、再登場フラグ立っちゃうじゃん。

モブはモブらしく、『不良A』とか『不良のリーダー』みたいに表記されていればいいんだ。

「と、とにかく！ わたしの子分をボコった代価を、払ってもらうんだからね！！ この兎黒未鉦とくろみなたのスーパー必殺奥義を喰らいなさい」

「名乗んなつたろ。てか、絡んできたのはお前の部下だからさ…」

…」

もしかして風紀委員ジャッジメントの腕章のせいで絡まれたのかな。どうでもいいけど。

兎黒とやらが、なんか両手を上げて「ハアアア」とか念じ始めた。何かする前に、巨大な螺子を数本取り出して兎黒を壁に磔にした。

「な、何よこれえ！？」

「兎黒さあーん！！！！」

地面に跪いている部下の一人が叫んだので、そいつの頭を足で踏みつけた。

兎黒は必死で、巨大螺子を外そうともがいている。

「あ、無理に剥がそうとすれば服破けるからね」

「この変態女あああ！！」

「じゃあね」

片手をひらひら降りながら、俺は次の現場へ向かうことにした。

「覚えてろー！！」とか、三下丸出しな泣き言を叫んでいたが無視無視。

生憎モブの名前を記憶する脳細胞はない。いい思い出程度に思っておこう。

しかし俺は近いうちに、意外な形で再び兎黒未鉈の名前を聞くことになる。

とかなりませんように。

第九話：不良掃除とオリキヤラ登場（後書き）

オリキヤラ登場しました。彼女は多分再登場する予定です。  
そして相変わらずの衣川さん。

第十話：取りあえず犯人が判明しました（前書き）

今回は短いですね。

原作介入って難しい……。

## 第十話：取りあえず犯人が判明しました

とぐ何トカさんを磔にした後、オリキャラ二号と出くわしそうな気がしたので不良無双を中止した。

そして今は、とある病院を訪れていた。

病院には幻想御手レベルアップで昏睡した人達が眠っており、俺のメル友（一方的）である介旅も入院している。俺が病院を訪れた目的は、介旅のお見舞いだ。

虚空爆破事件クラヒートンの時に、『俺が守るから』とか黒歴史確定なことを言った手前があるので、一度も見舞いに来ないのもどうかと思いついたのだ。

実はもう一つ目的がある。それは。

「どうにかして、木山の正体を気づかせないとなあ……」

佐天が幻想御手レベルアップを使用しなかったため、御坂達に木山が犯人であることを突き止められるように誘導する必要が出てきたのだ。下手に答えを言ってしまうば怪しまれるだろうし、俺が単体で木山をボコボコにしても意味がない。

ていうか下手すれば、統括理事会が何かしてくるかもしれない。今のところは、ある程度の行動に目を瞑ってもらえているが、不用意な行動は慎まない。

『ドラゴン』が来たら余裕で死ぬるし。勝つビジョンが思い浮かばない。  
エイワス怖い子……。

……そういえば、いつぞやかノリで『ドラゴン』って呟いたことがあるかも。

いざという時は銀河の果てまで逃亡しよう、うん。比喻ではなく本気で。

こんな感じで、目に見えない恐怖に怯えていると、廊下から声が飛んできた。

「ちよつといいかい？」

「いえっ!?! あれはドラクエの話をしていただけですわけでありましてので、別段お秘密をおりークしたわけでは……」

「うん？ ちよつと見せたい物があるだけだが、どうしたんだい。顔が真っ青だよ」

カエル顔の医者が怪訝な顔で俺を見ていた。

何だ、冥土ヘブンキャンセラー返しセラしかよ。統括理事会かと思っただぜ……。

ついでにと言っつて、俺は御坂達を呼んだ。最初は原作通り、御坂と黒子だけにしようかと思っただが、仲間外れにしているような気分に

なったので、佐天も呼んでいる。

ラッキーなことに、初春は樹系図ツリーダイアグラムの設計者が見たいからと木山先生の所へ行っているそうだ。

何とか必要なフラグは用意できたな。

後は俺がどう介入するかだ。

「これは幻想御手被害者の能波パターンだ」  
レベルアップバー

カエル医者カエルは、パソコンの画面に幾つかの波形を表示させる。それを見て俺は質問した。

「うんにゃ？ 所々同じ部分がありますけど、何か意味があるんですか」

「そうだね。能波は個人個人で違うから、同じ波形なんて有り得ないんだよ」

「どういうことですか？」

「おそらく、特定の能波に無理やり合わせられているんだろうね」

「つまり、強引に能波を弄くられたから人体に影響が出たということですか。そしてベースとなった能波を持つ人物が、幻想御手レベルアップバーを作ったと……」

俺がそう言っていると、カエル医者は別のウィンドウを表示した。

様々な人物の名前が乗っている。

「察しがいいね。君の言うとおり、能波パターンのベースとなった人物を検索した結果……」

パソコンの画面上に、とある人物の名前と写真が出てきた。それは。

「「「木山先生!?!?!」」」

俺と冥土返しを除く三人が驚愕する。  
ヘブンキヤンセラ―

「そっいえば初春って、木山先生のところに行ってるんじゃない……」

「「「初春さんが危ない!?!?!」」」

黒子が初春の携帯に連絡したが、繋がらなかった。一同の間で緊張と焦燥が走る。

「黒子ちゃんは警備員アンチスキルに木山先生の身柄確保を要請して。飾利ちゃんジャッジメントの保護も忘れずにね」

「わかりましたわ!」

「二人は一旦風紀委員の支部に戻ってて!」

テキパキと指示を出した後、患者の様子を確認したいと言って御坂と佐天と別れた。

その後、周囲に人がいないことを確認してから、アリバイブロック腑罪証明で木山先生の研究室へワープした。

目的は幻想御手のデータを手に入れるためだ。理由は何か面白そうだったから。ヘルファツパー

いつか役に立つかもしれないし。

木山先生のパソコンは、決められたら動作で起動しないとデータが消える仕組みになっている。しかし、アンサーターカーを持っている俺は、わけなくパソコンを起動させられた。

手持ちのメモカにデータを転送し終えたところで、アンチスキル警備員の足音が廊下から聞こえてきた。ジャツシメント

俺は電源を消し、ジャツシメント風紀委員の支部へ再びワープする。

支部には黒子、佐天、固法の三人がいた。

御坂の姿が見えないので、既に木山先生のもとへ向かったらしい。

「美琴ちゃんは？」

「木山と警備員が交戦している現場へ駆けつけましたわ。わたくし達は、ここで待機……って衣川さん!？」アンチスキル

俺は黒子の制止を無視して、猛ダツシユで外へ出た。

屋外へ出ると、デュラララの首無しライダーが乗っている、影でできた黒バイクを呼び出す。

頭に真っ黒なヘルメットを装着すると、黒バイクにまたがり発車した。

ヘルメットの下に隠された俺の可愛らしい顔は、凶暴かつ好戦的な  
笑みで彩られていることだろう。

さあ、木山春生。

楽しい楽しいシヨウタイムといこうじゃないか。

第十話：取りあえず犯人が判明しました（後書き）

今回は木山先生と衣川さんが激闘を繰り広げます。

というか晶ちゃん、チートのくせにアレイスターにビビりすぎなよ  
うな……。

友達に言われて気づきましたが、衣川晶はめだかボックスの安心院  
さんの一京のスキルを全部持っていることになるんですねww

第十一話：木山戦が開始しましたぞ（前書き）

今回はバトルをします。いやあ戦闘描写って相変わらず難しいですよね。あと全身筋肉痛で痛い……。

## 第十一話：木山戦が開始しましたぞ

黒バイクを超高速で走らせたので、わずか数分で現場にたどり着いた。

いやあー。バイクに乗るのもイイモンだね。

無免許だけどな（笑）

見上げると、橋からは煙が炎々と立ちこめている。

恐らくは木山先生が警備員アンチスキルと交戦していたのだろう。

今は、木山先生と御坂が相対中だ。

じゃ、早速原作介入しますかね。

ハンドルを握りしめ、橋の上までバイクで大跳躍した。物理的には有り得ぬレベルで宙を浮いている。

数十メートルは標高差がありましたね、はい。

そのまま木山先生と御坂の間を裂くように、黒バイクごと着地した。

「衣川！？ アンタツ……………」

「君はこの前の……………」

突然乱入してきた俺に、木山先生と御坂が驚嘆する。あるえ？ なんかデジャヴが……………。

「ちわー。衣川屋ですー」

「ちわー、じゃないわよ!!! アンタねえ、状況が分かってんの」  
ちよつと空気読まなかっただけなのに、うつせーな。骨粗しょう症  
だろ、お前（要はカルシウムが足りてないと言いたいのだ）

さすがに口にしたら超電磁砲地獄の憂き目に会いそうなので自重し  
よう。

「お久しぶりですね、木山先生」

「ああ……。喫茶店るとき以来だな」

「む、無視すんなーッ!!」

後ろの茶髪がビリビリウルサイが全力でシカトだ。俺は不敵にニヤ  
つきながら、木山先生と『会話』する。

「凄いですね。この人数と武器を意にも介さず始末できるなんて。  
さすが、多重能力者さん」

「お褒めに与り光栄だよ、とでも言えば良いのかね。厳密には多彩  
能力者と呼ぶべきだがな」

木山先生は、愉しげに笑う俺の顔を、まるで覗くかのように見つめ  
る。つばを飲み込むような緊張がほとばしる。

「成る程。君は、警備員やその超能力者とは何か違う。ただ、私  
を捕まえに来ただけではないらしい」

「察しがいいですね。わたしとしては、理由によっちゃあ木山先生を見逃しても良いのですけどね」

「私としても、そう済ませたいのだが……」

木山先生は俺の背後を眺めて、肩を落とし呟く。

「その子が許さないようだ」

見ると、御坂が身体中に紫電を走らせて木山先生を睨みつけていた。それは幻想御手レベルアップによる事件を起こし、能力者の幻想ゆめを利用した木山春生に対する怒りだ。

ククク、俺は自業自得だと思いがな。

ただし介旅（メル友だから）と眉毛（中の人が好きだから）には同情するね。

「……当たり前でしょ」

御坂は感情を隠さずに言い放つ。

「散々、人の気持ちを弄んだ……。アンタを見過ごせるわけないでしょうがっ!!」

「……だそうだ」

高ぶる御坂とは対照的に、木山先生は陰鬱とした調子で俺に語りかける。

うん。御坂が浮いてますね。

「まあ美琴ちゃんの正義の血がお盛んなようなので、年上のわたしが手伝うしかないっしょ。ちゅーわけで参戦してよろし?」

「……色々気に食わないけど、アンタが戦力になることだけは認める」

「はいはい、ツンデレールガン乙」

「誰がツンデレよ!」

「上条当麻は御坂美琴のことが好き」

「え、ふえっ!?!」

「『ウ・ソ』」

ハツとなって顔を赤らめる御坂を、下品な笑みで見つめる俺。いやはや、コレだからツンデレは。

「うっ……、ニヤニヤすんなっ!!」

電撃を俺に向けて飛ばしてきたので、後ろにステップして回避する。それを見て御坂は忌々しげに舌打ちをした。

お嬢様らしさが欠片もないわー。

「と、とにかく! マルチスキル 多彩能力者だか何だか知らないけど、こっちがやることには変わらないんだから!」

言いながら御坂は木山先生に向けて電撃を放つ。

しかし、何だかバリアだかドリームオーラの的なものを出して木山先生は電撃をガードした。それを見て俺は感想を漏らした。

「へー。一度に複数の能力を使用して、避雷針を創ったんですね」俺を賞賛するかのように、木山先生は薄く笑う。

「その通り。私は謂わば巨大な脳を操っているようなものだ。だから、こんな芸当もできるのだよ」

その瞬間、木山先生は衝撃波を片手で放ちつつ、巨大な氷の塊をいくつか掃射した。

御坂は後ろに向かって走ること、それを回避する。俺の場合は空中にジャンプして避けた。

「……アンタどういう身体してんのよ」

御坂が呆然としたように呟く。

え？ どうしてかって。それはね、俺が30メートルくらいジャンプしたからだよ。

ちなみに御坂の呟きが聞こえている時点で、俺の聴覚がヤバい領域に達していることもお忘れなく。

俺は橋の上に華麗に着地すると、そのまま木山先生に向かって駆け出す。

「くっ……」

何らかの能力を使い足場を歪めるが、俺はいちいち華麗によけている。

「ちえりおー!!」

俺は木山先生の顔面に目掛けて渾身の右ストレートを放つ。当たると判断したのか、木山先生は空間移動テレポートで俺から距離をとった位置へ移動した。

御坂はすかさず、ワープしてきた木山先生へ再び電撃を食らわせようとした。だが、その前に木山先生の足元から衝撃波が発生し、橋が破壊された。

そのまま下の河川敷へ全員落下していく。

まあ、木山先生と俺は普通に着地したけどな。御坂は地場を発生させて、辛うじて残っていた柱に張り付いた。

「…………拍子抜けだな」

至極残念そうに木山先生は感慨を漏らす。

「超能力者レベル5とはこの程度のものなのか。私としては、衣川とかいう少女の方が楽しめそうだ」

いやいや。そんなに誉められると照れちゃいますって。

反面、御坂はあからさまに不機嫌そうな様子で木山先生を睨み付ける。

「電撃を攻略したくらいで勝ったと思うな!」

吼えながら、コンクリートをブロック状に切りとり木山先生にブン

投げる御坂。それを木山先生はビームソードで粉碎した。

「ありゃ？」

御坂は思わず間の抜けた声を出してしまふ。

対応する間もなく、御坂の足下が円柱状にえぐり取られた。

「しまっ……!？」

「あらよつと」

あまりにも御坂が可哀想なので、墜落する彼女をお姫様抱っこでキヤッチしてやった。

「あ、ありがと……」

抱きかかえられた御坂が照れた表情で呟く。

……何この可愛い子。

こんぐらい素直になれば、さすがの上条も落ちるんじゃない。

と、そんな感じで空気を読まない思考をしていると、木山先生が語りかけてきた。

「私の目的は、ある事柄について調べることだけだ。誰も犠牲にはしない。全てが終わったら全員解放する」

それは譲歩というよりは宣言と言ったところだな。確かに、木山先生は今も苦しんでいる子ども達を救いた<sup>レベルアップ</sup>いただけだ。幻想御手を使用

した被害者連中も相応の罰を受けただけに過ぎない。ともすれば、木山先生が『悪』だと言えるだろうか。あくまでも真実を知っている俺はそう思わないね。

だが。

「ふざけんじやないわよっ！！！！！」

木山先生の言葉に御坂は怒る。良く言えば純粹な、悪く言えば子供じみた怒りだ。

「あれだけの人を巻き込んでおいて犠牲を出さないですって……。こんな口くでもないことをしてまで研究したいコトなんて、認められるわけないでしょ！！！」

「やれやれ」

そんな御坂を見て、木山先生は心底呆れたように言う。

「超能力者<sup>レベル</sup>とはいえ、所詮は世間知らずのお嬢様か……」

「確かに。美琴ちゃんほど空気の読めない人間なんて知らないし」

「アンタ等だけには言われたくないわ！　そして衣川っ、アンタはどっちの味方よ！！！」

相変わらずのKYぶりを発揮する俺だが、木山先生のスルースキルは相当なようど話を続行する。

「君達が受けている能力開発。あれが人道的なものだと思っている

のか」

まあ、脳みそに電極を差したり薬物を使っている時点でロクなもんではないだろうよ。禁書はアニメから入ったんだけど、原作で超能力開発の説明を読んだときは若干ひいたよ……。

禁書ってホント黒いよね……。

「学生の脳を弄くり、日々『開発』する。それがどんなに危険なことか解っているだろう……」

「……まあね。学園都市がトンデモナイ街なのは最初から気づいていたしね」

俺は訳知り顔で軽く呟いた。御坂は怪訝な顔をしたが、構わず臨戦態勢を続行する。

そんな御坂の姿を見て木山先生は、

「残念だ」

近くにあったゴミ箱をテレキネシス念動力で操作し、中に入っていた空き缶が空中にバラまかれる。

介旅初矢のグラビトン虚空爆破だ。

この数で大爆発などを起こされたら、ひとたまりもないだろう。俺には効かないけどね。

「全部ぶっ飛ばす！」

御坂は身体中から電撃を放ち、空き缶を破壊していく。

「落ちろおー!!」

懐にしまっておいた何十本ものナイフを空き缶に投げつけていく俺。御坂は呆れを通り越して何も言わなかった。

「……凄いな。だが」

木山先生は御坂に感づかれなないように、手元の空き缶をワープさせる。

それに気づかない御坂はしたり顔で、

「ざっとこんなモンよ! もうお終いな……」

そう言い終わらないうちに、御坂の背後に移動した空き缶が大爆発を起こした。周囲の地面が比喻でなく根こそぎ吹き飛ぶ。

「うわー。アブナイ」

棒読みで台詞を言いながら、俺は爆発地点から横っ飛びで離れた。残ったのは地面に倒れ尽くす御坂だけだ。

「もっと手こずるかと思ったが……。恨んでもらって構わんよ」

用は済んだとばかりに、御坂から興味をそらす。そして、木山先生は俺の方を向いてきた。

「さて、衣川といったか。君はどうするんだ。邪魔者はいなくなつたし、君なら少しは物分かりが良いだろう」

「火火ツ。随分と過大評価してくれますね。わたしは善悪でなく快

か不快、ルールではなく感情論で判断しますからね。事情が事情なら、さっきも言ったように見逃してやりますよ。ただし」

少し間を置いて、

「その子が許さないようだ」

先ほどの木山先生と同じ台詞を言った。

木山先生が言葉の意味を理解する前に、御坂に身体を掴まれる。

さっきの爆発の瞬間、御坂は即席の盾を創ったのだ。

なので俺は爆発から御坂を助けなかった。

まあ、木山先生をボコるのは呼吸をするくらい簡単なのだが、御坂が密着状態で電撃を放たないといけない。でなければ、御坂が木山先生の過去を知ることもなく、AIMバースト幻想猛獣が発生しない。

156

「あのバカや衣川には効かなかったけど。さすがにあんなにトンデモ能力は持っていないわよねっ!!」

「くっ……」

周囲のアスファルトを操作して虚しい最後の抵抗をするが、御坂は止まらない。

「遅い!!」

「ガアアアアア!!」

御坂の電撃を食らい、木山先生は叫び声をあげる。

次は幻想猛兽AIMバーストだな。

全てが予定調和に進んでいく……。

第十一話：木山戦が開始しましたぞ（後書き）

どうでもいいけど小学生って最高ですよね。

夏はロウきゅーぶ、楽しいです。

冬はシーキューブ、楽しみです。

第十二話：幻想猛獣とか恐いわ（前書き）

相変わらず不安定な更新ですね（苦笑）

今回はA I Mバーストの前半戦ですね。

思ったより長くなったあああああ！！

## 第十二話：幻想猛獣とか恐いわ

ゼロ距離からの電撃を浴びた木山先生の身体が、ドミノのように倒れていく。

それを御坂が何とか両手で支えた。

「一応、手加減はしておいたか……えっ!？」

唐突に御坂は驚愕を見せた。どうやら、木山先生の過去を電気信号を介して覗いているようだ。行橋の受信感応みたいなモンだろう。

ついなので、その『狭き門』リミテッドアクセスによる受信感応で俺も覗いてみることにした。

……。

……。

……。

……。

……。

うん。

伴里ちゃん、マジでどこの軽音部のりっちゃんだったね。

あと木原幻生もげろ。

やっぱ木原一族って遺伝子レベルでいかれてるって。あんなキヤわいいシヨタやロリをこんな目に逢わせるなんて。

もし、あの老害と出逢うことがあったなら、スカーレット致死武器や万華鏡写輪

眼で精神ズタボロにした拳げ句、有らん限りの手段で拷問し尽くしてやる。ああ、そうしよう。小学生を虐めた罪は重いのだ。

俺がサデイス度満点な構想を練っていると木山先生が意識を取り戻したようだ。

木山先生は茫然とする御坂を振り払いながら呻く。

「……………くっ。見られたか」

「どうしてあんなことが……………」

あまりにも衝撃的な惨事を見た御坂の声は震えていた。まあ、学園都市の闇を目の当たりにすれば当然か。俺は小学生つていいよなつて考えていたけど。

「あれはA I M拡散力場の制御実験とされていた……………。が、実際には『暴走能力の法則解析用誘爆実験』だった」

真実としては、それすらフェイクなだけだな。それを言ったら、色んな人に睨まれそうなので言わぬが花だ。第一、記憶を弄くんの面倒だし。

「意図的に暴走を仕組んで、A I M拡散力場の暴走条件を知るのが本当の目的だったのさ。もっとも気づいたのは後になってからだがね……………」

「……………人体実験」

超能力者<sup>レベル5</sup>でありながら、そのような『闇』を知らなかった御坂。別

に悪いとは言わん。

学園都市としても、第三位の超電磁砲レールガンは内外に対する広告塔的なものとして利用していたいのだろう。

木山の悲痛にも似た独白が続く。

「あの子どもたちは今も眠り続けている。私達はあの子どもたちを使い捨てる実験動物にしたんだ!!」  
モルモット

「でも、そんなことがあつたなら警備員アンチスキルに連絡して……!!」

「学園都市がグルなら意味がないんじゃないの」

「……衣川!？」

いい加減空気になりそうなので、俺も話に交ざることにした。

「木山先生は何度も足掻いたけれど、学園都市という巨大な力に叩き潰された……。違いますか?」

突然の俺の介入に、木山先生は目を見開きつつも言葉を紡ぐ。

「ああ……。子どもたちを救う方法と事件の真相を解明するために、ツリーダイアグラム樹系図の設計者の使用を二十三回も申請した。だが全て却下された  
!!」

「え……?」

え? じゃねえよ御坂。

正義と悪なんて巨大な力によっていくらでも螺子曲げられてしまう。

中二のときにそんなことを考えていました（笑）。

俺は区切りを付けにかかろうと、核心をつく。

「つまり木山先生は子ども達を救うために、レベルアップ幻想御手によるネットワークを構築し、それをツリーダイアグラム樹系図の設計者の代替品にしようとした、かな」

「……なっ!?!」

御坂は本日何回目だか解らない、びっくりリアクションをする。それでも木山先生のこと認められない御坂は反論を続ける。

「……だからって、こんなやり方!」

「君に何が分かるっ!?!?!?!?!?!」

だが、木山先生の怒声がそれを遮った。

「あの子たちを救うためなら何だってする……。この街を敵に回しても、止めるわけにはいかないんだ!?!?!?!」

この世の全てを焼き殺すかのような絶叫が響き渡った。それは木山春生が背負った、限りなく絶望に近い運命の重さなのだろう。

だが。

それは一つの発火元となった。

「……ぐうっつ!?!」

突如、木山は何かに苦しみだした。頭痛を抑えるかのように、頭を抱えてもがいている。

「ちよつと……!?!?」

「木山先生!?!」

御坂と俺の声も耳に届いていないようで、木山は謔言のように呟いた。

「ネットワークの暴走……!?!? ……虚数学区、五行……機関」

最後にごめん、と口にして木山は地に倒れ伏した。

俺達が駆けつける間も無く、事態は加速する。

木山の身体から、白くて透明な布だかトレットペーパーだかそうめんだかよく解らないものが出てきた。

やがてソレは異形の赤子のような形状へと収束する。頭部に天使の輪を冠した怪物。

AEMバースト  
幻想猛獣が産み堕とされた。

「何……あれ? 胎児……!?!?」

御坂は驚嘆と恐怖から、張り裂けそうなくらい眼を見開いている。

というか若干顔芸気味になってますぜ美琴さん。

ぎりぎりヒロインがしちやいけない顔だ。



下手すりゃトラウマものだね。

奇声と共に、<sup>AEMバースト</sup>幻想猛獣の周囲から衝撃波が放たれた。

「うわっ！」

御坂は咄嗟に磁力で鉄の盾を創り、俺は両腕をクロスしてガードした。

<sup>AEMバースト</sup>幻想猛獣が、続けざまに巨大な氷塊を乱射してきた。

なので、俺は両手に握った日本刀で氷を全部砕き、そのまま<sup>AEMバースト</sup>幻想猛獣の背中を切り裂いた。

「よっぴ……」

着地すると、御坂が驚きというより呆れの表情で俺を見つめていた。やべ。ちよっと調子に乗りすぎた……。

「御坂さん、衣川さん!!」

ちよつどいいタイミングで、<sup>マイエンジェル</sup>聖天使・初春が駆けつけてきた。両手の手錠は木山先生が外してくれたようだ。

「初春さん! だめじゃない、こんなトコ来ちゃ!!」

「……」

少し揉めている二人を尻目に、俺は<sup>AEMバースト</sup>幻想猛獣を見る。

俺達を追ってくる様子はなく、ただ夢遊病患者のように辺りをさま

よっているだけだ。

何だか、ぬら孫の魔王・山本五郎左衛門を思い出すな。インパクトでは幻想猛獣AIMバーストに匹敵すると思う。

まさか萌えキャラ（？）の山本さんがあんなのになるなんて……。

つて、また話が脱線しそーや……。

ネットワークを断絶しない限り再生し続ける幻想猛獣AIMバーストは俺にとって、絶好のサンドバックだ。

さあて、どう料理してやるのかな。

幻想御手のレベルアップ制作者・木山春生は鉄柱に寄りかかって呆然としていた。

「凄いな……。あんな化物が生まれてしまつとは。学会に発表すれば表彰ものかな……」

異形の怪物・幻想猛獣AIMバーストを見据えて、木山は自嘲的に笑う。

結果としてネットワークは木山春生の手を離れ、彼女が救おうとした子どもたちの回復手段を失った。

「フフフフフフフフ」

木山は嗤う。破滅的に嗤い続ける。己の非道に、己の至らなさに、愚かさだ。

やがて声が止むと、木山はポケットから黒い物体を取り出した。そして、それを自分のこめかみに当てる。

「……………お終いだな」

木山が手にしていたのは拳銃だ。当然、弾がこめられている。

トリガーを引き、弾丸が自らの頭蓋を穿つ。

それだけで、木山春生の人生は幕を閉じられる。木山には、この先の未来に夢も希望も感じられなかった。

早く楽になりたい。

その一心で指に力をこめようとするが。

「ちえりおおおおおお！！！！！！」

突然駆けつけてきた少女に跳び蹴りを喰らわせられた。木山の身体がギャグマンガ風に、思い切り転がっていく。

「……………？」

木山が困惑していると、黒髪ショートの高校生・衣川晶が立ちはだかっていた。

「自殺とか、アンタバカなの？ 死ぬの？」

指をビシイっと木山に向けて仁王立ちをしている。

腕の辺りを擦りむいたせいか、木山は若干苛立ち気味な眼で衣川を見た。

そんなことは気にもしない様子で、衣川は鬱陶しそうに幻想猛獣AIMバーストを見上げる。

「……とりあえずルイズの物真似はさておき、木山先生にはまだやることがあるでしょう」

「そうですよ！ まだ諦めちゃいけません！！」

その声に木山が振り向くと、頭に花飾りを乗せた初春飾利と御坂美琴がいた。

「どうすれば、アレを止めることができるの？」

木山先生AIMバーストが幻想猛獣の説明をし終えたところで、御坂が単刀直入に質問する。それに木山先生が答える。

うんテンプレですな。

「AIMバースト幻想猛獣はレベルアップ幻想御手が産み出した怪物だ。ネットワークを破壊できれば恐らく……」

「消滅するって訳ね」

何としてでも、話に交わりたい俺は無理やり会話に割り込んでいる。いちいちタイミングに困ってしまう。

初春は思い出したように、ポケットから小さな記録媒体を出した。  
レベルアップ  
幻想御手の治療プログラムだ。

んで、さっそく初春が治療プログラムをインストールしに駆けていった。

御坂は幻想猛獣AEMバーストと闘うようだ。

はてさて俺はどうしたものか……。

すると、御坂がいつになく真剣なおもむきで俺に声をかけてきた。

「衣川……。アンタが妙なチカラを持っていることは、さすがにみんな気づいているわ」

「ぎくう！！！！　な、なななななな何のことかな……」

「いや。反応からしてバレバレだからアンタ」

うわっ辛辣すぎる……！

俺の能力について、どう説明すりゃあいんだよ……！  
科学サイド相手に、『これは魔術ですか？　はい、魔術です』作戦じゃ済まされないし……。



俺は幻想猛獣を眺めながら、不気味というか気味悪く嗤い続けた。

「ちよ、あのお衣川さん……」

「じゃあ早急に血祭りショータイムだぜ、幻想猛獣オオオオオ！」

「おい。危ない薬をやった人みたいになってるわよアンタ……」

第十二話：幻想猛獣とか恐いわ（後書き）

今回、晶ちゃんが随分とキチっていましたが、多分転生の苦労とかで色々溜まっていたのでしょう……。  
生暖かい目で見守ってあげてくださいな（笑）

第十三話：幻想猛獣をフルボツコの巻（前書き）

約1ヶ月ぶりの更新になります。いざチートにしようと思ったら、手付かずでこの様です。

いい加減、自虐ばかりの前書きにならないようにしたい（涙）

### 第十三話：幻想猛獣をフルボッコの巻

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッー！！！！」

どうも、毎度おなじみの衣川晶です。

凄まじいハイテンションで幻想猛獣をフルボッコ中のところだ。

あ、警備員アシスキルは邪魔なのでギアスを使って一部（黄泉川とか）を除いて避難させといたから。

現在、王の財宝で、AEMバースト幻想猛獣に向けて大量の宝具を乱射している。宝具の他に紙くずや飲みかけのペットボトルがあるのは、俺が王の財宝をゴミ箱代わりにしたからだ。

チートってホント便利だな。

「どう見ても、超能力者レベル5を越えてるでしょ……」

呆然と呟くのは、さつきから俺の虐殺劇ショータイムを眺めていた御坂だ。能力を使っても大丈夫かと思っただが、流石にやりすぎたかな……。けどやめない

「白銀、抜刀！！」

俺は駄目押しとばかりに、アスラ・マキーナ機巧魔神の『白銀』を召還した。影から数メートル大の白い機械の巨人が現れる。

『闇より深き深淵より出でし 其は、科学の幻影かげを裁く剣！』

白銀から聞こえる、金属をこすりあわせたような声。その重低音は、



「衣川っ!？」

「大丈夫だ。問題ない」

御坂が叫ぶが、一応ジャンプして回避したので俺は無事だ。しかし、  
うっかり王の財宝を解除してしまった。白銀も、これまたうっかり  
戻しちゃったよ。

自由になった幻想猛獣は無差別に能力を周囲へ撒き散らす。

AIMバースト  
YABEEEEEEEE!!!

全部ワザとだけどな(笑)

「ワンサイドな試合で満足できるなら、世に縛りプレイなんか無い  
っつの」

言いながら、転送能力で警備員アンチスキルの銃を奪い、全部の弾を撃ち込んだ。  
その後、重力を操って鉄橋を丸々一本折り、幻想猛獣AIMバーストの頭上に墜落  
させる。ついでに、俺が視認できる川の水を全部使って氷付けにし  
た。

もう少し手加減(?)してやるから、あがいて見せる幻想猛獣AIMバースト。劣



猫被りモードは即席で作ったからな、言動やテンションが狂いがちなのは認めるが。さっきまで、バーサーカー状態だったし。

と、<sup>AEM</sup>幻想猛獣が俺の方へ巨体を押し込むように突撃してきた。なので、<sup>IM</sup>ノーモーションで足元の地面を巨大な数本の杭に錬成した。<sup>A</sup>幻想猛獣が小さく見えるほどの土杭が、一切の丸みを感じさせない先端を尖らせて、貫く。

「de j k a 刺 s n 裂 k s ! ! ! ! !」

「ちんたらしてんじゃねえぞ雑魚の団子野郎がああああああ!!」

叫びながら日輪・天墜をぶちかました。集約された太陽の光に<sup>AEM</sup>幻想猛獣の身体は焼き尽くされたが、やはり再生する。

多少は怯んだような態度を見せたものの、そのまま建物へ向かって進撃を続けやがった。

うん。

<sup>AEM</sup>幻想猛獣と闘ってて、何か既視感を感じていた。

コレ、モンハンのラ シャンロンだわ。

「ふーん。こりゃあとんだ長丁場が期待できそうだな。御坂はどう思う」

「ほんと。どいつもこいつも人を苛々させるわね……」

よっぽど鬱陶しいのだろう。エンドレスエイトチックな作業に御坂は苛立ちを露わにし、怒気を混ぜた声で愚痴を漏らす。

「チツ。いくらやってもキリが無いわ……」

「そーですねー」

「怪獣映画かつてのー!!」

「そーですねー」

「再生とか反則技だろーがッ!!」

「そーで……」

「返事くらいマジメにしろオオオオオ!!!!」

俺のそーですね攻撃に御坂の堪忍袋の緒が切れてしまった。俺が三発目を言い終わらないうちに電撃を飛ばしてきた。どう見ても人を殺すレベルの電撃だ。お巡りさん、殺人未遂現場はここですよ。

サンダガ撃って相殺したけど。

ほんとカルシウムが足りてない奴だよなー。そんなだから胸も貧相というか虚しいんだよ。この、バスト飢餓地帯女」

「後半、丸聞こえよ!!　そして何だとコラ!!」

「まあまあ。カルシウム不足も立派な個性だよ」

「貧乳じゃなくて!?!」

ちなみに俺の胸囲はそれなりにある。尻が若干でかいものの、ベストボディだ。

ホントなら長身で細マッチョなイケメンにして欲しかったが、チートの反動で今は女だ。おのれ、神様。

『（それって八つ当たりですよね……）』

今、天の声が聞こえた気がするが空耳だろう。

と、御坂と夫婦漫才をやっていたら、隙を見た幻想猛獣AEIマーストが触手で御坂を捕まえた。そのまま宙につるし上げられた。

仕方ないので、ゲキニガスプレーAEIマーストで幻想猛獣の動きを止めておく。

御坂の足も固まったがキニシナイキニシナイ。

しばらくは攻撃が出来ないはずだ、どっちもな。

「ほらー、美琴ちゃんが無駄話をするからー」

「どの口が言っつー!」

「宙ぶらりんで突っ込まれてもな……」

抵抗できずに為すがままにされている御坂なんてレアだな。なかなかエロい。

「やーい、ビリビリーミサカン」

「び、ビリビリ言っな……」

「貧乳 貧乳 ペタ娘」

「だーまーれー!!!」

「当麻『俺も好きだぜ、衣川……。今すぐにも食べちゃいたいな』  
昨日、わたしが当麻さんとBの上でした会話です」

「え……。び、びー？」

そう話すと御坂は顔を赤く染めて、ソワソワし始めた。心なしか目に涙をためているように見える。

詳細な説明をすると、騒がしい昼休み。俺はベンチ（B）に座りながら上条と二人きりで食事をとっていた。

俺も上条も自分で作った弁当を食べている。俺って意外と料理が得意なんだよ。

ちなみに俺の弁当箱は、女子が使うような愛らしいミニ弁当だ。ご飯には羊さんが描いてある。

いやー、いつのまにこんな趣味ができてたんだろ？ 前までは『マスコット？ ハッ』みたいな風だったのに。人の趣味も変わりゆくものなのだろう。

上条とは世話を焼きつつ焼かれるという関係なので、『今度、晶とくせー当麻くん用おべんとを作ってあげるよ』と提案したら、何故か上条がドギマギしていた。俺のブリっ娘演技が気持ち悪かったからかな。

その後妙に視線を反らされるし、話しかけたら変な奇声をあげられるし。

それはさておき、具にはタコさんウィンナー、ハート型ハンバーグ、にんじんを星形に切ったポテトサラダ、ミニ苺を入っている。

……あとホビロン。

そこで、グロ料理とかトラウマとか花咲くいろはとか言っとな。意外とイケるんだって、コレ。

ほんとだもん！ 美味しいんだもん！

『ホビロンっておいしーよね。食い物じゃねえとか言ってる奴はマジでホビロン』

『ハハハ。意味わかんねえよ。でもさ 俺も好きだぜ、衣川。今すぐにでも食べちゃいたいな』

って当麻くんも話してたし。好き嫌いはよくないよねー。わたしのイチオシだもん。

最後の部分だけを抽出すれば見事、『いやーん』な会話になるわけであって。

キヤッ、あきらエツチなこ

すいません。キモイです。ごめんなさい。

以上のことをチェリーガール美琴に告げたら、自らの勘違いに気づき違う意味で顔を赤くした。ざまあ（笑）。

「あ、あ、ああああ……あ、あ……あ、アンタがへ、変な言い方を  
するからてつきり……」

「当麻くんが、わたしの■■■■を■■■■したり、セクシーな■■■  
■■■を■■■だいたりしたと……。さすがHENTAI、妄想力  
旺盛でなによりです」

「へ、へんたいは、アンタよ！！でも、なんでアンタがアイツに  
弁当をやるのよ！おかしいわよ！」

御坂が指を突き出して、妙な言いがかりをつけてきた。あるえ、こ  
いつってこの頃から当麻く……。上条に気があったっけ？まあ、黒  
子ちゃんがそれっぽいことを言っていた気がするけど。

ただし、俺が上条に弁当を作ろうとしていることを糾弾される謂わ  
れはない。微妙に御坂に対して苛立ちを覚えたので反論しとく。

「え？わたしが当麻くんの親友だからでしょ。お弁当の作りっこ  
ぐらい当然じゃん」

「ぐぬぬぬ……」

原作でも姫神と具を取り替えていたし、シャナの吉田さんだっつてや  
っているから、ノープロブレムであろう。

それでも御坂は納得できないようで、食い下がる徴候もなく文句を  
つけようとする。

なんなの、この娘……。

「だ、だからってねえ……！付き合ってもいない男女が……」

「議論は後でな。来るぞ」

「へ？」

御坂が反応するか否かのうちに、<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣が触手を振り回して彼女を地面に投げつけた。近くにあった原子炉の壁に磁力で張り付いて、事なきを得たが。

ゲキニガスプレーの効力が切れ、<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣の暴虐が再開された。

……だが、

「治療プログラムの転送完了かな」

「この音楽……。初春さんがやってくれたのね」

どこか幻想的で、けれども夢から覚めるような、不思議で奇妙な音が流れている。<sup>レベルアップ</sup>幻想御手を媒介にして生み出された力場の塊が、積み木のように崩れていくような気がした。

そして、これにより<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣が再生することは最早ない。

その事実を認識した御坂は、<sup>AIMバースト</sup>獰猛かつ好戦的な笑みを<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣へ向けた。

「悪いけど、これで。ゲームオーバーよっ!!」

放たれる電撃。穿つは、雷の槍。赤ん坊が泣き叫ぶような悲鳴が響く。

<sup>AIMバースト</sup>青い光が<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣を焼き尽くした。結果、<sup>AIMバースト</sup>幻想猛獣は力尽きたように地面に倒れ伏した。

御坂は幻想猛獣<sup>AIMバースト</sup>が撃退されたのを確認し、ほっと安堵の息を漏らす。全てが終わったのだと安心してしているのだろう。

「気を抜くな！！ まだ、終わっていない！！！！！」

突然の木山先生の怒声に御坂が驚く。

同時に、焼き炭同然となっていた幻想猛獣<sup>AIMバースト</sup>が、まるで未練を抱いた怨霊のように復活する。幻想御手使用者の呪いがそうさせるのだろう。

「あれはAIM拡散力場が産んだものだ。普通の生物の常識が通用しない！！！」

「だったらどうしろっていうのよ！」

「核だ。力場を固定する、『核』を破壊すれば……」  
あまりの事態に半ば恐慌状態でもめる二人だが、

『あk a あn………』

幻想猛獣<sup>AIMバースト</sup>から聞こえる声に、全員が凍ったように動きを止めた。それはさつきまでの意味不明な叫びとは違う、意味と意思のこもった声だ。

『おれk 達はu 出g 来損ない』

『だと、思z 1 ってs a やがる』

『 r r r r 毎日がe惨cめ』

『カkのt u m iあるh奴に見下さe g j p n』

『見p返iしたm d i』

『 l a e もう諦rめyつかな』

『 みるm h dな僕jをみg』

『ピラフ食いてーw w w w』

『認めj j j fて欲しいのよ』

『 H e g r l b n n リートがk g g a m w t p g g j m m 儲い』

『 j . j g g k g g あjのp p g v u w に追いつh k k k g o n i』

『 無m t p 能j m g tと超能力者g g j g g c i h u x j』

『 世界k m j aがi k u q m 違h j j』 『c u a』

『 あなたには理解できないm a v』 『j g g』

『 a m i 格n k u e 下u m e』 『e』  
『 g g g j i a m t 下j z k e g g i i かな』

『 見下t t h a j m n a i だよ』

『 お前n i 何がw c b a かるM t q b i q u w』 『i r v』 『』



AEMバースト  
幻想猛獣から溢れ出した、使用者達の恨みや願いを聞き終えて、俺は一度深呼吸をした。そして頭を掻きながら、俯いている御坂の方を振り向く。

「なあ。眠っているガキを叩き起こすにはさ、なにが効果テキメンかな……」

「そりゃあ決まってるでしょ……」

そこで御坂は顔を上げ、決意を決めたような笑顔で、

「ドデカい電撃よ!!!」

叫びとともに雷電が指先から弾け飛んだ。そのまま、AEMバースト幻想猛獣の身体を磁場が覆い尽くす。しかし、これでは致命打にはならない。

木山先生が苦汁を飲み干すように呻く。

「あれではAEMバースト幻想猛獣を止めることが……」

「よく見る木山先生。あれが負ける奴の顔か」

「な……!? あれは」

俺の言葉に木山先生は気づいたようだ。AEMバースト幻想猛獣の身体が表面から削れ諦めを見せない御坂の表情の先で、AEMバースト幻想猛獣の身体が表面から削れていた。ゴテゴテに塗り固められたメッキを剥がすかのように、皮

膚が消し飛んでいる。

「多分、電気抵抗をねじ込んでいるんだろうよ。御坂もよく考えたよな」

「私と闘ったときは本気じゃなかったのか……」

大ダメージを負った幻想猛獣<sup>AEMバースト</sup>は、虚しい抵抗を続ける。

氷塊の乱射。光弾による砲撃。触手を振り回した打撃。吹き散らす炎。大爆発。まるで自らの劣等感に押しつぶされた能力者の足掻きのように抗う。

対比するかののように、ずっと前を見続けた御坂美琴は、その程度の壁など取り払ってしまふ。

周囲を舞う黒い砂鉄の波が、迫り来る攻撃から御坂を護る。

結果は一目瞭然だった。

「

!!!!!!!」

!!!!!!!

手段を断たれた幻想猛獣<sup>AEMバースト</sup>が、力任せに突進して最後の抵抗を行う。

御坂は逃げずに立ち向かった。その指には一つのコインが握られている。

「悪いけど、自分<sup>パーソナルリアリティ</sup>だけの現実を他人に委ねている人たちに負ける気がしないわ」

思念の塊へ語りかけような、御坂の声。俺は勝手に続けることにした。

「努力は必ず叶うってのは妄言だと俺も思う。勝ちたくても勝てない、頑張りたくても頑張れない。そんなものだろうよ……」

なんの努力もせず神様からチート能力をもらった俺。そんなやつが、言う台詞じゃないと思う。

それこそ、上から目線の説教と変わらないし、心のどこかでコイツらを見下しているのかもしれない。

「ただな、すんげー子どもみたいな先生が言っていたんだ。『努力しても伸びるとは限らないけど、何もしない人は成功しない』って」

確かに俺がイ力を喉に詰まらせなかったら神様に出逢うこともなかっただろう。そう意味では無駄なことなんて無いはずだ。

「今まで頑張ってきたことも、これから苦労することも全部、なかったことにはならないんだよ」

素養格付？ 個体差？ 魔術？ そんな括りで話しているんじゃないかね。超能力に縛られない人間そのもので語っているんだ。

「だからさ、諦めてもいいから一回だけ俺を信じてくれよ」

少なくとも、あの優しい優しい神様が創ったすべての世界が、人の努力を嘲笑うはずがない。たとえどんなに離れていても、必ずどこかでいつか繋がるはずだ。

ちよっとくさい自分の台詞に照れだしてきた。でも、悪い気分では

ない。

そして、虚空を舞うコインが落下を始めたところで締めくくる。

「こんな卑怯者チートの妄言でも、気に入ったんなら心に留めてくれや」

言い終わって、どこともなく神様のいそうな遙か空を見上げる。

同時に、幻想猛獣AEMバーストの核を貫いた、超電磁砲レールガンの眩しい軌跡が青空を横切った。

超電磁砲レールガンで撃ち抜かれ、自らを支える核を失った幻想猛獣AEMバーストは、その名の通り幻想ゆめであつたかのように脆く儂く消滅していく。

それは幻想御手事件レベルアップが終了した時間であつた。

第十三話：幻想猛獣をフルボツコの巻（後書き）

晶ちゃん女の子化計画は水面下で進行中。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4456t/>

---

とある世界にチート転生してしまった件について

2011年10月2日18時54分発行